
王子様とアタシ

義忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様とアタシ

【Nコード】

N9108M

【作者名】

義忠

【あらすじ】

同棲中の男に夜逃げされ、呆然とする27歳のアタシの前に、浮かぶぬいぐるみが現れ、少女の頃のように「変身ヒロイン」として戦うことを求めてきたのだが……。

ぼろ雑巾に重油を染み込ませたような、校了明けの重い身体を引きずって、アタシは朝の改札へと漂うように近づいてゆく。

疲れた。疲れきっていた。

月刊誌の宿命として、月に一度の毎度の苦行ではあったが、今回は半端じゃなかった。フリーのライター三人使ったの一二頁の小特集。楽勝のスケジュールで臨んだはずが、外タレの版權画像の使用に本国のエージェントが噛みついてきたのがケチのつき始め。国内のプロダクション経由では埒があかないので、ブローケンな英語で国際電話の向こうとやりあい、何とかそれを丸め込んだと思ったら、今度はライターのひとりが「サバンナにアフリカ象を見に行きます」などというふざけた書き置きメールを残して失踪。翌日、成田の出国ロビーで家出中学生みたいにめそめそ泣いてる三十路男を発見するや、首根っこを引っ掴んで編集部に駆け戻り、たっぷりと脅して賺して締め上げて、隅の空いてるデスクに文字通りビニール紐で縛りつけて嚴重監視下に置き、ひと安心——と思いきや、その隙に、担当を任されてるオヤジ向けの連載エロ小説が、何やら発行元の出版社の役員の逆鱗の触れたらしく、急遽、連載中止が決定していた。

メタボを気にする中年太りの塾の教師が、生意気盛りのいたいけな女子中学生達にアンなことやコンなことを、されるといふどこまでもしょうもない話だったのだが、どうもヒロインのひとりがその役員の娘だか孫だかと同姓同名だったのがまずかったらしい。作家と一緒にノリノリで企画を立ち上げ、担当をアタシに押し付けるに当たっては、ニヤつくその面そのものが紛れもないセクハラだったハゲ編集長は、発行元に一片の抵抗も行うことなく、後始末だけアタシに投げて寄こした。勿論、この業界、発行元の出版社の前に雇われの編集プロダクションごときの発言力など無きに等しい。ましてや、編プロ内での編集長と契約社員の関係は言うまでもなく、編

集長はアタシに作家への打ち切りの通告と空いた紙面八頁分の穴埋めの任務をしれつとした顔で命じてきた。どうせアンケートも振るわなかったし、話のあまりのくだらなさに辟易してたので、打ち切りそれ自体に抵抗はない。だが、唐突にすかっと開いたこの真っ白い八頁分の台割をどう埋めろと。

殺す。いつか必ず、このスケベ狸を殺してやると、入社以来の三年の間に数十万回と胸で唱えたであろう呪阻の文句を、ここでも何度か繰り返しながら、作家宛のメール一本を書き上げて、それから思い当たるツテに片っ端から電話を掛けまくる。学生時代の友人の彼氏の知り合いの元カノの従兄弟いとこというツテと呼ぶにはか細すぎる繋がりまで辿った結果、突然連載を打ち切られた作家から数十キロバイトに及ぶメールが帰ってくる頃には、何とかでっ上げた人妻実録浮気話の記事を台割に押し込む目途はついた。ちなみに作家のメールは目を通すまでもなく中身の見当がついたので、読まずに捨てた。どうせ女子中学生の上気した肌の描写に、自分がいかに文学的心血を注いできたかという、作品以上にしようもない主張が詰まっているに違いない。ほとぼりが冷めたら、菓子折り持って顔を出して、適当に持ち上げてやればいいだろう。あんな作家の原稿でもいざという時の誌面の穴埋めくらいにはなる。

そんなことより、問題は時間だ。

既に手持ちの仕事の予定はことごとく遅れている。印刷所からは探りの電話が掛かってくる。それを適当になだめつつ、作家やライター、DTP屋を叱咤激励慰撫恫喝を繰り返して原稿を上げさせる。勿論、自分で書く原稿だってある。「キリマンジャロの稜線に掛かる夕陽が……」などとまたしても遠い目で現実逃避を図るライターを締め上げる。こいつが今書かねばならない原稿は、九〇年代アイドルの特集記事だ。アフリカの大自然は関係ない。DTP屋が上げてきたカラー頁は、新人の連絡ミスで色味がずれていた。その色校正しを終えた土壇場で、広告原稿の差し替えが起こる。畜生、ありえない。更によりにもよって、フィルム出しの段階で致命的な校正

ミスを発見。直す。直す。ひたすら直す。畜生。

印刷屋との熾烈な攻防で寸秒刻みに入稿までのタイムリミットを稼ぎつつ、怒涛のごとく押し寄せる諸々のトラブルを端から薙ぎ倒し、ようやくのこと入稿までこぎつけて、輪転機を廻し始めた旨の電話が印刷所から入ったのが午前四時。つい一時間前まで殺伐とした会話を交わしていた印刷会社の担当者に嘘偽りのない心からの感謝の言葉を伝え、第一次世界大戦（WWI）の西部戦線のトーチカなみに社員、契約社員、アルバイトにライターどもの死屍累々たる編集部を後にして始発電車に飛び乗った。帰りの中央線から明けてゆく街並みをぼんやりと眺めているうちに、机に縛り付けたライターの紐を解いてやるのを忘れていたこと思い出す。……ま、いいか。毎度のことながら、校了までの数日間、女を捨てた日々だった。前に風呂に入ったのはいつだったか。いや、その前に自宅に帰るのも三日振りだ。あれ、四日振りだっけ？ 頭の中に朝靄あさもやのような霞かすみがかかってよく思い出せない。

ふと視線を向けると、改札横のキオスクが開店準備を始めていた。雑誌編集者の性さがで無意識の内に朝刊を買い求め、一面のヘッドラインを流し読みつつ、改札を抜ける。

『連続宝石強盗 時価総額五億円以上強奪！』『今月に入って三件目！』などという見出しが踊っている。

ふーん、という以上の感慨はない。年収三百万強、ろくに残業代もつかない労基法なんぞ頭から無視の職場で働きながら、かつかつの生活を過ごす庶民には無縁の話だ。住民税も上がったしな。何より石くれに億単位の値をつけようなどと考える世界のことなぞ、想像もつかない。

勿論、アタシだって女だから、誰かがくれるというなら、否やはない。もつとも、こんな上等な宝石をくれそうな知り合いには、生まれてこの方、さっぱり恵まれない身の上なので、妄想にもリアリティを欠くこと甚はなはだしい。

どうせ今の自分には、同居人のゴクツブシがたまに持ってくる、

安物のアクセサリくらいしか縁がないのだ。それとて、パチンコだかスロットだかの景品とバレバレで、あからさまにこっちの機嫌を取ろうとする見え透いた手口なのだが、それでもどれも捨てずにタンスの奥に仕舞いこんでいることは、本人には無論、言っていない。

およそ経済的生産性にはまったく寄与しない無駄な二枚目面であら付く同居人の顔を思い浮かべている内に、仕事明け特有のむらむらと立ち上がる性欲を意識してしまう。

あー、帰ったら押し倒して一発キめて寝るか——と、そこで己の発想のダメさ加減に絶望的な気分になった。いや、勿論、二七歳にもなる成熟した女として、性欲を否定するつもりはさらさらない。疲労がピークに達した時に特有の生理的な現象であることも判っている。しかし、それにしたって嫁入り前の娘として、もうちょっと表現の仕様ってもんがあるだろうと我ながら反省する。

……ああ、いや、確かに、あの男がウチに転がり込んできて以来、校了明けにちよつと無理やり気味にコトを致してしまったのは、両手で効かなかったりするのも事実だが。

それも涙目で下から無言で訴えかける年上の無駄な美形というシチエーションが妙にクるものがあり、何というか、こう、いつもより――

いや、いや。そんなことを微に入り、細に入って思い出してどうする。

まったく。自分で言うのも何だが、これでも可憐な文学少女だった頃だってあったのに。

ま、就職活動で大手出版社に入り損ねて以来、せめて出版マスキの仕事に関わりたいたいとあちこちの編集部に出入りしている内に、気が付けば風俗誌すれすれの三流オヤジ向け雑誌に腰を落ち着けて早三年目。いつの間にやら転がり込んできた男との同棲生活も二年を過ぎ、今更、清纯派ぶるつもりもないが、どこでどう間違っているのかわからなかったのかと振り返りたい今日この頃ではある。

やっぱ、あれか。中学の時に知り合った友達が悪かったのか。何

でも恋愛話にこじつけないと物事を理解できないあの能天気なあーばー女とつるんでる内にごっそり偏差値を落とし、あげくに「友情」のお題目に目が眩くらんで志望校のランクまで落としてまで高校進学につき合ってしまった辺りがやはり人生の分かれ道だったのではなからうか。しかも当の本人は短大を出るなりとつとイケメン高収入の大手商社マンと結婚して、ついこないだなど旦那の赴任先のパリから今度二人目の子供が生まれる旨の絵ハガキを送りつけてきやがった。いや、だから、そんな話はどーでもいいから、旦那の同僚の独身男をさっさ紹介しろと何度言ったら判るのだ、あの女は。

そんなことをふやけた頭でとりとめもなく考える内に、木造モルタル二階建て、築一五年のアパートにある我家に辿り着いた。一階のポストから不在の間に突っ込まれた手紙やらチラシの類たぐいをそのま
ま中身も見ずにバッグに放り込み、疲れた身体を押し上げるように
アパート脇の階段を上り、自分の部屋の鍵穴に鍵を突っ込む。

鍵が開いている？

またあのバカ、鍵も閉めずに寝てるのか、とちよつとムカつきながらドアを開ける。

と、不意にまばゆい光に包まれ、アタシはとつさに目の前を手で遮さえぎった。

「ちよつと……っ!？」

カーテンも閉めてないの!？と怒りかけ、はたと我に返った。

いや、確かにこの部屋は東向きで、今の時間に朝日が差し込んで
も不思議はない。しかし、それにしたって明るすぎやしないか。

やがて光に目が慣れ、ようやく部屋の状況を把握し――

アタシはそのまま玄関先にへたれ込んだ。

「……やられた……」

そこには、家財道具一式から絨毯、カーテンに至るまで、きれい
さっぱりなくなったワンルームのアタシの部屋で、フローリングの
床が朝日を弾いて輝いていた。

落ち着け。冷静になれ。

バックの中に手をつ突っ込んで、昨夜封を切ったばかりのラークの箱から一本取り出して口に咥える。一緒に取り出したライターで火を付けようとするが、指先が震えてなかなか着火しない。何度か繰り返し返すうちに感情を抑えきれなくなり、獣のような唸りを上げてライターを床に叩きつける。

落ち着け。冷静になれ。

もう一度胸で呟き、大きく深呼吸——そこでようやく、同居人の安否に思い至る。

これが泥棒か何かの犯罪だとすれば、アイツはどうしたの？

不意に膨れ上がる不安感に衝き動かされるように慌てて部屋全体に視線を走らせると、部屋の真ん中にA4サイズの紙がぽつんと置かれていて気が付いた。

「……………」

立ち上がる気力のないまま玄関口からそこまで這って辿り着くと、近所のスーパーの特売チラシの裏紙に油性ペンでこう書かれていた。

『ごめん、アミちゃん。』

急にお金が必要になったんだけど、アミちゃん仕事で忙しそうなので、業者さんに頼んで家財道具を処分して用立ててもらいました。怒ってるよね。僕も悪いと思ってます。

とてもアミちゃんに合わせる顔がないので、しばらく旅に出ます。探さないでください。

僕は、どこか遠い空から君の幸せを祈っています。

愛しています。

さようなら』

「……………」

とても三〇過ぎの大の男が書いたとは思えない、ふざけきった内容の置手紙を最後まで読み終えたアタシの忍耐力は褒められていいと思う。だからその間の震え続けていた手と、読み終えるなり細切れに引き裂いて床にぶちまけた辺りは大目に見てもらいたい。

はつきり言って、怒りよりも情けなさの方が先に来た。

いくらお金が必要だったのか知らないが、家財道具の処分なんかで手に入る金など高が知れている。前に夜逃げの取材で調べたことがあるのだが、業者に足元を見られて買い叩かれるのが関の山だ。

そんな端金のために男から関係——と、いうかこれまでの生活を清算されたのか、その程度のものだったのかと思うと、腹が立つより虚しく、やりきれなかった。

まあ、男に家財道具売り払われて逃げ出されるというのは、女のだめんず話の定番で、その手の取材もしたことがあるのだが、実際に自分がやられるとここまでダメーじが深いものとは思わなんだ。気が付けばポロポロと涙まで流して嗚咽している自分に、愕然となる。

別に結婚なんてするつもりもなかったし、もつとましな男を見つけたらとつと追い出さなきゃくらいに思っていた程度の相手だから、別れること自体は、まあ、「有り」なのだが、こんな形で向こうからというのは想像もしていなかった。よりにもよってあんなダメ男にダメ出しされたのか、アタシは。

いや、百歩譲って、「捨てられた」ことも認めてやってもいい。

だが、いくら何でもその理由が「金」ってこたあないだろう。それも家財道具を叩き売った程度の端金で。畜生。せめて「他に女が出来た」とか何とか、もつとましな理由を取り付くろうくらいの気を使えってんだ。それもスーパールのチラシの裏ってな何だ。タイムセールで卵一パック百円って。ふざけんな、バカ。……………。

空っぽの自分の部屋の真ん中で、床に手について鼻をグスグスと鳴らしながら、思いつく限りの罵詈雑言を胸の内繰り返す。もつ

とも、校了明けの疲れきった頭ではろくに怒りも持続せず、その内、脈絡もない思考に無気力に流され始めた。

やがて、「そういや、アイツがくれたあのアクセサリーも業者に持ってかれたのかしら……」などと薄らぼんやりと考え始めた辺りで、そいつは唐突に現れた。

「大変だよ、マーキュリー！ また君の力が必要なんだっ！！」

「……………」

顔を上げると、目の前でネコのぬいぐるみがぷかぷかと宙に浮いていた。

「また妖魔達が地上に現れたんだ！ 君も聞いているだろ、連続宝石店強盗。あれはやつらの仕業なんだ！」

「……………」

ぬいぐるみから目を逸らし、ぐると室内を眺め廻す。誰が喋ってるのか。無論、誰もいない。やっぱりこのぬいぐるみなのか。その辺のゲーセンで拾ってきたような、安物のこのぬいぐるみが？

「ああ、この姿かい？ 適当な依代よりしろが見つからなかったんで、手近で間に合わせたんだけど、変かい？」

その安っぽいフェルト地の死んだ目をこっちに向けるな！

首を捻って顔を逸らすと、それに合わせてぬいぐるみが宙を滑り、視界の正面まで移動してくる。

こ、こいつ……………っ！

「とにかく、またあいつらが王子を狙って、こっちの世界に……………もぎゅっ！」

ぐだぐだくっ喋ちやべるぬいぐるみを引っ掴むと、バッグの奥に突っ込んだ。

疲れた。疲れきっていた。

校了明けだし、男は家財道具売り払って失踪しやがる。そりゃあ、幻覚のひとつも見ようというものだ。

寝よう。もう、とにかくまずは寝ることだ。

ふかふかの布団とベッドでしっかりと爆睡すれば、おかしい幻覚も消え去ってくれるだろう。

バタバタと暴れるバッグに一発入れて黙らせると、アタシはゆらりと立ち上がって自分の部屋を後にした。

「……ふう、やっと僕の話聞いてくれるんだね、マーキュリー」
「……………」

消えやしねえよ、この幻覚。畜生。

駅前のファミレスで、アタシは再び目の前に浮かぶぬいぐるみから目を逸らし、手元のハンバーグの切れ端にフォークを突き立てた。

あの後、駅前のビジネスホテルで夜まで爆睡した。家財道具を売り飛ばされたとは言え、多少の蓄えはある。預金通帳と印鑑は常に持ち歩くようにしていたのが幸いした。いつ何時、出張が入るか判らない雑誌編集者の嗜み^{たしな}——と言えは聞こえはいいが、勿論、勝手に同居人のパチンコ代にされなくなかったからでもある。

まあ、そんなわけで、当座の活動に困らない程度の金は手元にあるので、一泊分のホテル代くらいは何とでもなる。

目が覚めて、視界の片隅でまだモゾモゾと動いているバッグをなるべく見ないようにしながら、携帯で同居人——もはや「かつての同居人」だった男の番号を呼び出す。寝る前は頭がよく廻ってなかったが、考えてみれば真っ先にやるべき話だった。あの男には、料金アタシ持ちの携帯を持たせてある。

『……お掛けになった電話番号は、お客様の都合によりお繋ぎできません』

着信拒否かよ!?

この世に自分で料金を払っている携帯から着信拒否を喰らうほどムカつく話がないことをひとつ学習すると、後で公衆電話から掛け直しちゃんことを誓って携帯を切った。

それからバスルームでシャワーを浴び、鏡の前で軽く身繕いを済ます。

しばらくカットに行っていない所為で、元々、ショートだった髪がおかっぱみたいになっていた。一二時間以上の睡眠でも疲れが抜けきれなかったのか、目が充血して真っ赤だ。まあ、寝てる間もずっと泣いてたみたいだったから、その所為かもしれないけど。

結局、何がショックと言って、いい歳して男に逃げられたくらいでここまでダメージを喰らっている自分の存在が一番ショックだった。まったく、初めての失恋というわけでもないのに。つか、そもそもそんな恋愛感情で付き合っていた関係でもないってーの。飲み屋で意気投合して、目が覚めたらアタシん家^ちで一緒のベッドで寝て、後はそのままずるずると居つかれただけの、そんなどこにでもあるような話なのだ。

それが、こんなおかしな幻覚見るほどショックだったのか、アタシや。

重い気分でベッドルームに戻ると、ぬいぐるみを突っ込んだままのバッグがごろごろとベッドの上を転がっていた。

「……………」

男に逃げられたばかりの二七の独身女性としては、他にも直視しなければならない現実がいくらでもありそうなのだが、さて、とりあえずこのふざけた幻覚をどうしてくれようかと、アタシは天を仰いだ。

で、ホテルをチェックアウトして、ファミレスでハンバーグ・セツトをつついていると、ぬいぐるみ入りのバッグがばんばんと勝手に飛び跳ね始めた。周囲の冷たい視線にさすがにほっとくわけにもいかず、やむなく引っ張りだしたぬいぐるみがのたまったのが、先刻のあの台詞だ。

アタシはフォークを突き立てたままのハンバーグの欠片を口に運ぶ気も失せ、そっと周囲に目をやった。夕食時の駅前のファミレスはそこそこに込んでいたが、やはり平日だけあって家族連れより

も仕事帰りの勤め人や学生達の姿が目につく。テーブルの間を忙しげに飛び廻るウェイトレス達を含めて、こっちを気に留めていそうな人間はいない。

……こうしてテーブルの上をぶかぶかと黒猫のぬいぐるみが浮いているにも関わらず、だ。

「さっきバッグが飛び跳ねていた時には、あんなに注目を浴びてたのに……」

額に手を当ててうめくアタシに、ぬいぐるみは得意げに言った。

「魔法のおかげさ。今の『ボクの姿』には、普通の人間には『見えない』ように魔法が掛けてあるんだ。だから、バッグの中なんか『隠される』と魔法の効果が出なくて、ただの物体として認識されてしまう。それで、動きで注目されるようなこともおきるんだ」

「やっぱり、幻覚じゃない！」

「だから、違うって！ もう、めんどくさいなあ。しょうがない、さっさとこいつで思い出してもらうか——」

そう言って、骨のない、へなへなの右腕を小器用に背中へ廻すと、ぬいぐるみは自分の身体の五倍はありそうな長い棍棒のようなものを引き抜いた。

「君のマジカルステッキだよ、マーキュリー！」

「いや、そんな殴られたら痛そうな、物騒な突起物だらけの棍棒なんて知らな——」

「じゃあ、いっくよくっ！」

「ちよっ！ そんなもんで殴られたら死——」

「大丈夫。痛いのは最初だけだから」

「待て、バカっ！ 下手な男の決まり文句みたいなそんな台詞で、おまえ——」

皆まで言わせず、ぬいぐるみが大上段から振りかぶった棍棒は、直上からアタシの脳天へと襲いかかった。

その瞬間、これまでの人生で間違はなく三本の指に入る激痛が、頭から爪先までを稲光のような火花とともに駆け抜けてゆく。

と同時に、ある意味、それ以上に「激痛もの」の封印されていた記憶が、その時の情景や感情とともに、時系列を無視して一斉に迫ってきた。

そう。

中学二年——アタシ達が十四歳だった、あの頃。

四人の親友達と過ごした、あのかげがえのない日々の記憶が。

「思い出したかい、マーキュリー？」

「……思い出したわ、ルナ……」

アタシはファミレスのテーブルに突っ伏したまま、うめくように呟いた。

「そうか。よかったよ。これでだいぶ話がしやすく——」

「……年端もいかない中坊時代に、夜な夜なキャバ嬢みたいな痛いコスプレで街を徘徊してた記憶を」

「いや、まあ、その辺は見解の相違というか……子供には結構、受けが良かったみたいだし」

「ガキはね、ああいう原色系でひらひらしたフリルつけた格好で出てきてやれば、何だって喜ぶのよ」

言いながら、自分自身、初めて変身したときの妙な高揚感とはしゃぎっぷりを思い出し、改めて鬱になった。ええ、まったくガキでしたよ、あの頃のアタシは。

「で、何の用よ、今更。あの時、あんた等の世界までみんなで乗り込んで、ラスボスのクイーンぶちのめして、めでたしめでたし、って落ちでまるく収まったんじゃないの？」

半分、何かを誤魔化すように不手腐れた口調で訊くアタシに、ルナはどこか遠い目——まあ、ぬいぐるみのフェルト地の目に遠いものに近いもないが、とりあえずそういう体^{てい}で視線を逸らす。

あれ、ちょっと待て。こいつ、前にあったときはメスじゃなかったっけ？

「……それは、同じ頃、テレビでやってた『何とかムーン』っていうアニメの方だよ。設定や格好が良く似てたんで、子供たちに良く間違われてたけど、君まで間違えないでよ」

黄昏たそがれきった口調でルナは言った。

まあ、ネコだのぬいぐるみだの憑りついて人語を喋る化け物つかまえて、今更、オスもメスもないか。

「続けていいかな」と有無を言わさぬ冥くらい響きでルナは訊ねてきた。正直、ろくでもない話を聞かされるんだらうという確信はあったので、今すぐ逃げ出したかったのだが、骨格のないふにゃけたぬいぐるみが発するにしては、あまりにおどろおどろしい威圧感に、結局、逃げ出すタイミングを見失う。

で、それから小一時間に渡って聞かされた話は、案の定、ろくなものじゃなかった。

アタシ達が殴り込みを掛けて悪の独裁者クイーンをぶちのめし、正統な王位継承者たるタキシード王子が魔法の王国の玉座についてから、十年――

その後の王国の辿った運命は、ありていに言って、権力継承にくじって地域紛争に転がり落ちる発展途上国そのものだった。

まず根本にある問題を指摘するなら、イケメンではあっても、何かっちゃ、敵にとっ捕まって、アタシ等に助けられていたようなあのどん臭い王子に、国家経営など務まるはずもなかったという点に尽きる。だいたい前政権の打倒さえ、異世界から呼び寄せた小娘五人に助けられて、なのだから、そら、舐められるわな。

その結果、地方豪族は叛乱を起こす、中央の貴族は腐敗して国庫を喰いものにする、大商人は商業道徳を捨て去って利益ばかりを追い求め、失業率はうなぎ上り、とあっという間に転がり落ちるように状況は悪化した。

ここまで堕ちるのにたった三年と掛からなかったというから恐れ入る――というか、もともとクイーンの独裁政権下で疲弊していた王国に必要だったのは、力尽くでも復興を推し進める強力なリーダーシップを持った政治家であり、血筋だけ優良な政治センスゼロのお人好しではなかったという話だったのだろう。

その後、さらに事態は悪化した。中央を無視して地方豪族が群雄割拠し、勝手に争い始めたのだ。それを止めるべき国軍の兵器兵糧は腐敗した中央貴族の手によって地方豪族へと流されていた。資源や商売の利権を当て込んだ大商人が資金援助と武器の流通を買って出たため、豪族達はますます力をつけ、あげくに中央の政治に口を挟むようになった。

事ここに至り、遂に一念発起した王子は十万余の国軍全軍を自ら率い、叛徒征討の戦旅を起こす。

で、それがこの王子の王国での唯一にして最後の政治的決断となった。

なぜなら、首都を離れて僅か五日後、一兵の敵兵と干戈を交えることなく、この大軍勢は霧散消失してしまったのだ。

……いや、どういうことかという。

首都に全軍召集を掛けた時点ではほとんどの部隊が定員割れを起こしており、加えて国軍の兵站能力は既にも同然だったから、そもそも首都までの道程で糧食が尽きて引き返した部隊も少なくなかった。そんな有様だから、首都までたどり着いた連中も待機中に、あるいは首都進発後に「こりゃあダメ」だと櫛の歯が抜けるように大量に脱走を始める。

さすがにこの事態を憂慮した青年将校達が王子の寝所に押しかけようとしたところ、親衛隊と通す通さないのひと悶着を引き起こし、それがとうとう刃傷沙汰にまで発展して、遂には青年将校達は身柄拘束。結果、拘束された将校の所属していた部隊が、指揮官奪還の動きを示すや、それに「すわクーデターか」と過剰反応した親衛隊と一部部隊が武力衝突を開始。一方、中央司令部から何の連絡もなく放っておかれた残りの部隊は、それぞれ独自の判断を強いられ、その多くが「まずは混乱する状況から距離を措くべき」と至極もつともな判断を下して、指揮下の部隊をまとめて宿営地から離脱し始めたのだ。

で、夜が空けた頃には公称十万余の精鋭討伐軍は、一兵残らずその場から消え失せていた、と。

こうなると、もはや王子の血筋がどうだろうと関係ない。理由はどうあれ、ここまで派手な失態をしでかしたのだ。むしろその無能それ自体が叛逆を正当化しかねず、さすがのこの状況に側近達すらさじを投げた格好で、王子はそのまま地上世界へと亡命することになった。

「……自刃せんとする王子の手を取り、それがしが地上へと落ち参らせたのでござる」

「……………」

何やら大河ドラマか時代劇かといった芝居がかった口調で、ルナがとうとうとまくしたてる。

……まあ、要するにあまりの無能さに、体よく国外追放された、とそれだけの話なのだが。

しかし、本人にとって見れば、それが一番幸せな選択だったろう。アタシの中のタキシード王子のイメージは、バラを手に颯爽と現れるヒーローなどではなく、無闇とはしゃいでまとわりつくムーンを無碍むげにもできず、困ったようにはにかむ姿だったり、時折見せるひどく苦しい表情だった。あまり、アタシ達の前ではそういった表情は見せないようにしていた節はあったが、普段のへらついた表情とのギャップがやけに印象的に記憶に残っている。

あれは今にして思えば、年端もいかない少女達を戦いに捲き込んでしまったことを彼なりに悔いていたということか。どだい国家元首なんて務まるような図太い神経とは縁の遠そうな、どこにでもいそうな優男やさおやういだったわけだし。

……あれ？ でも、どっかで会ってるような気がするな。十何年も前の話でなく、つい最近。

こっちに來てるといふのだから、別に顔を合わせても不思議じゃないのだが。

ま、いっか。

「でも、まあ、それで八方丸く収まって、めでたしめでたしじゃない。無能な王子は追放されて、本人だって気が楽でしょう。今更、アタシ等の出番があるとも思えないんだけど？」

とつとつこの辛氣臭い話から解放されないかしらと、うんざりと訊ねる。

「この話にはまだ先があるんだ……」

どうもルナの陰々滅滅としたこの軍記ものじみた話は、まだまだ続くらしかった。

王子の亡命後、内戦は更に激化の一途を辿った。

事実上、解体した国軍部隊がそのまま地方豪族と合流したり、逆に地元で一旗揚げようとしたりしたためだ。そのおかげで、一時的に紛争が激化したりもしたのだが、ただ若干、状況は変わっている。中央の支配を嫌って各々分離独立を志向していた地方豪族達の振る舞いが、むしろ中央の権力を奪い合って勢力が収斂する方向へとシフトしはじめたのだ。

元からいないも同然だった国家元首とはいえ、実際にいなくなつたとなると話は別だ。「権力の座」があらさまに空席となつて鼻先にぶらさがっており、しかもそれを奪取することに倫理的なハードルもなくなつたとなれば、手を出さない方がおかしい。

要するに「群雄割拠」から「天下布武」へ、というわけだ。

こうして皮肉にも、王子の亡命以来、王国の政治情勢は求心力を取り戻していった。その意味で、王子は亡命することで、初めて国のために役立ったといえなくもない。

とはいえ、天下獲りのバトルロイヤルに決着が着くまでに、幾度かの大規模な会戦と数えきれない小競り合い、村落の焼き討ち、人身売買、民族浄化エスニック・クレンジングといったろくでもないプロセスを経る必要はあつたようなのだが。

いずれにせよ、数年の後、数多あまたの敵を打ち倒して首都を奪取した大豪族の女頭領は、自らクイーンと名乗り、政権の継承を宣言した。それですぐに世情が収まったわけではないが、それから一年で叛乱分子を数十万ほど粛清する頃には、クイーンに叛旗を翻そうなどという威勢の良い連中もあらかた片付き、国状は安定した。

「数十万を粛清って……」

「前のクイーンが政権に就いた時には、もう二桁くらい多かったからね。逆に王子の時は一人も粛清しなかったから、それで豪族や貴族に舐められたって側面もあつたんだよね」

どん引きしているアタシをよそに、ルナはさらりと身も蓋もない

発言を口にする。いや、まあ、紛争地帯から来た人間(?)のメンタリテイが、アタシ等文明人と一緒とも思わんけどもさあ。

ともあれ、叛逆者には容赦はないものの、市民生活レベルではまずまずの治世を行っていたクイーンだったが、首都攻略戦の際に負った傷が元で病に伏せることが多くなった。

そこで問題になったのが後継者だ。

第一王位継承権者で国軍を掌握する第一王女と、秘密警察や内務官僚を掌握する第二王女がその最有力候補とされていた。しかし、両者の仲は悪く、どちらかが政権に就けばもう一方は必ず粛清されるだろうというのがもっぱらの噂だった。そして、王宮の下馬評では妹の第二王女の方がいささか分が悪いとされ、それだけに彼女はこの情勢をひっくり返す手立てを必死に捜し求めた。

「そこで、彼女は王子の存在に目をつけたんだ」

「……いや、よく判らんのだけど」

ヘタレな国家元首だったとはいえ、王子は王国ではもっとも古い血筋であり、国民全体の血脈の源流とされる、正統にして高貴な家柄の継承者である。婿に迎えれば、いまだに根強く残る旧王家支持の民衆や貴族の勢力を取り込んで、姉を凌ぐことができるかと踏んだらしい。

第二王女は揮下の秘密警察に激を飛ばし、王子の消息を追及させ、遂に地上世界に亡命したことまで突き留めた。

一方、第一王女もその動きを察知し、地上世界に工作員を派遣する——先に王子の身柄を押さえるか、あるいは抹殺するために。

「……生臭い話」

うへへとアタシは呟いた。魔法少女ものに憧れる女子中学生の夢の結末にしては、無残極まる落ちだった。

「で、話はようやく宝石強盗の話に戻るわけだけど」

王国の人間が地上世界で活動するためには、宝石に込められた人の強い想いのエネルギーが必要らしい。ああ、この辺のおファンタジーな設定はまだ生き残ってるのね。それでどっち側の工作員か知

らないが、宝石店を襲いまくってる、と。

「でも、こんな派手なこと繰り返してたら、こっちの警察に目を付けられてすぐに行き詰るでしょ」

「前の女王の下でこっちに来ていた連中は、皆、君たちが殲滅したからね。きつとこっちでの活動経験のある人間がいなくて、穏便に宝石を調達できるルート構築ができないんだよ」

「殲滅」とか言うな。いたいけな女子中学生を唆^{そその}して、ろくでもない仕事やらせやがって。畜生。

「だから、今暴れている連中を叩けば、奴らのこっちでの本格的な活動の開始をそれだけ遅らせることができるんだ」

「あゝ、そうですか。そら、よごさんした……って、なんでこっち見てるのよ？」

「だからさ、奴らを叩くのに協力して欲しいんだ」

「い・や・だ！」アタシはぼしんとテーブルを叩いて言い切った。

「他、当たってちょうだい！」

「いやあ、もう既に当たっては見たんだけど……ムーンはパリで出産予定日近いっていうし、ジュピターはニューヨークでモデルの仕事、ビーナスは外資系企業の重役で現在、上海に出張中って感じで、皆、国内にいないって」

負組で暇こいてそうなのはアタシだけってか、この野郎。

「マーズはどうしたの？ アイツこそ、神社継いでるんだから、この手の仕事、本業でしょ？」

「いや、それが、もうお国の仕事になっちゃってるから、上司の許可なしにアルバイトはできないって」

……どんな世界に首突っ込んでんだ、あの女？

「だから、ここはマーカーリーしか……」

「やーよ、何でアタシが。だいたいアタシだって、別に暇なわけじゃ——」

言いかけて、ふと考えた。

何も知らなかった中坊の頃ならいざ知らず、今更、このぬいぐる

みの口車に乗って地域紛争の片棒を担ぐ気はさらさらない。

だが、雑誌編集者の性^{さが}として、特ダネ臭がぷんぷんとするこんな話をこのまま見逃すのも惜しかった。ウチの雑誌に載せられるかどうかはともかく、これだけ新聞で大騒ぎになっているニュースならどこに持ち込んでもいい金になるだろう。だいたい家財道具売り払ってくれたバカ男のおかげで、金もないし。

アタシはバッグの中を手早くあさって、常時持ち歩いてるデジカメとレコーダーの存在を確認した。妖魔の映像なんかまともに写したらオカルト誌にしか持ち込めなくなるが、そこはそれ、適当にシルエットだけ押さえてやればいいだろう。

「いいわ、判った。協力したげる」

「本当かい？」

「ええ」アタシは頷いた。

「だけど、連中が次にどこ襲うのかなんて判るの？」

「大丈夫」ルナはふにゃふにゃの腕で胸を叩いた。

「連中は十番町を中心に、エナジーが強い順に宝石店を襲ってるんだ。だから、こっちのセンサーで調べれば、一発さ」

ルナの手元の空間で、半透明のパネル状のウィンドウが開く。こいつ、また、おかしな技を……。

ま、今更、そんなこと気にしても始まらないか。

これ以上、この店で独り言呟いてると、真剣に二度と出入りできなくなりそうだし。

伝票を手にしち上がりかけ、ふと視線を感じた。ウェイトレスが二人ほど、眉をひそめてこっちを見ている。

……やっぱり、もう、手遅れかもしれない。

娘時代に夜な夜な出歩いていた———という噂が悪すぎるが、中坊時代にホームグラウンドにしていた十番町界限は、半ば予想通り、辻々に警官が立つ厳戒態勢下にあった。

それも当たり前っちゃ当り前の話で、ルナのセンサーに頼るまでもなく、このひと月で八件も宝石店強盗は発生するわ、ましてや各国の大使館も近い地区ともなれば、どんなに不祥事だらけの警察だって真面目に仕事しようって気になるだろう。

「さすがにこの厳戒態勢で宝石強盗なんて、いくら妖魔だって無理よ」

路上をふらついているとこっちが犯人扱いされそうな雰囲気、慌てて飛び込んだコンビニから外を眺めつつ、アタシはルナに小声で言った。

「昨夜だってこんなもんだったよ」 あっさりどルナは言っただけだ。「だから、ぼくらには自分たちの姿を地上の人間に認識させない魔法があるんだって。それを使えば、人間の警官隊なんて何人いたって同じさ」

……人間様を舐めやがって、こいつら。

しかし、これではスクープどころじゃない。この分だと、今夜襲撃されるというその店まで辿り着けるかどうか怪しい。

「どうやって、店まで近づく気よ？」

「だから、僕等もその魔法が使えるんだってば。自分達に掛けて現地向かえば、誰にも気づかれないよ」
なるほど。

「じゃあ、とっとと現地向かいましょう」

アタシは夜食のおにぎりとお茶のペットボトルの入った袋を片手にコンビニを出ると、後輩のライターから貸しを取り立てる形で徴発したクリーム色のベスパにまたがった。何をやるにせよ、まずは

メシと機動力というのが、駆け出し時代に先輩から叩き込まれた編集者の心得だ。バイクなら逃げ出す作家も追いかけられるしな。

これも後輩から取り上げた少し大き目のヘルメットのアゴ紐をきつく締めると、キック一発でベスパを目覚めさせる。

そして軽やかなエンジン音とともに、アタシは戒厳令下の夜の十番町界限へ滑り込んでいった。

その店は十番町の外れ、賑やかな商店街から距離を置いて、個人の邸宅や大使館が並ぶ入り組んだ界限の一角にあった。

シャッターが下りているとはいえ、いわゆる一般的な宝石店のきらびやかさとは無縁の、地味な店構え。ツタに絡まれた小さな看板をよくよく見れば「宝飾店」の三文字を見つけることが出来るが、それとてもライトアップされているわけでもなく、何やらとりあえず屋号ぐらいは掲げておかないとでも言いたげな、いい訳じみた大きさだった。

今時インターネットにHPも設けてないこの店は、一見さんのちゃらついた一般客など相手にしない、本物の金持ちだけを相手にしている店だった。というか、その筋系のライターから仕入れた話では、どちらかといえば財界関係者やら政治家、宗教法人などが主な顧客で、脱税の片棒を担いでいるだとか、海外の盗品を密かに政財界の大物に融通してるとか、とかくいろいろ噂のある店のようだった。

ルナに言わせると、「こういう店で扱っている宝石の方が、エナジーの回収には効率がいいのさ」ということらしい。

……何か、どんどん取り返しをつかない方向に足を踏み入れてないか？

店からワンプロック手前でベスパから降り、角からひよいと首だけを突き出して店の様子を眺めていたアタシは、げっそりと溜息をついた。

表通りの店があれだけ次々と襲われているのにも関わらず、巡邏パトロールの警官の姿をひとりたりと見かけないのは、警察もこの店の存在に気づいてないのか、はたまたどこかの筋から近づくなどとも言われているのか。

昼間でさえあまり人通りの多くなさそうな細い路地を、等間隔にならぶ街灯の光がさびしげに照らしている。この辺の邸宅はどれも鬱蒼うつそうとするほど木々が生い茂っていて、それが喧騒を吸収しているのか、たいして離れているわけでもないのに表通りからの気配がまったく感じられない。

しんと静まり返った深夜の住宅街の辻に立ち、ひとり（プラスぬいぐるみ一匹）で得体の知れない「妖魔」の出現をじっと待ち続けるというシチエーションを冷静に考えれば考えるほど、真剣に己の正気を疑いたくなってくる。

つか、これで妖魔じゃなくて、大物政治家とかどこぞのヤクザとかの余計なスクープをモノにしてしまったら、この寒空に東京湾で海水浴でもさせられる羽目になりかねんな。

やっぱりやめて帰ろうか、と振り返ると、ルナが例のステッキをアタシの鼻先に突きつけてきた。

「ちよっと！ 危ないでしょ！」

「いや、だってマーキュリーの変身ステッキだよ。ちゃんと持ってももらわないと、いざというとき変身できないし」

「……………」

アタシは眉間を軽く揉んで言った。

「変身なんかしないわよ」

「え？ じゃあ、どうやって戦うのさ？」

「戦わない」アタシはきっぱりと宣言した。

「ええっ！？ じゃあ、なんでここまで来たのさ？」

「スクープものにしに来たに決まってんじゃない。用が済んだら、とっとと帰るわよ。そのためにベスパだって借りたんだし」

「だ、だって、マーキュリー！」

「だってヘチマもない。あんたらの益体もない地域紛争なんか首突っ込む気はないの。ヘタレ王子がどうなろうと知ったこっちゃない。こっちはこっちの生活ってものがあんだから。第一、この歳になってあんな恥ずかしい服着れるかっての」

「いや、あの頃とそんなにサイズ変わってなさそうだから、全然平気——」

「喧嘩売ってんのか!? あんた!」

ぬいぐるみの胸倉を引っ掴んだその時、不意にぞくりとした悪寒が背筋を駆け抜けた。

「あぶない!」

「きゃっ!」

中空に軸点も定まらずに浮かぶぬいぐるみのものとは思えない強い力でルナに突き飛ばされ、アタシはその場に尻もちを付いた。

「ちょっと、何すんの——」

と言いかけ、すぐそばの路上に深々と串のような物が数本突き立っていることに気づいた。位置関係と入射角からいって、あのまま立っていたら、この串はすべてアタシの後頭部に突き刺さっていただろう。

「な……っ!?」

「さすがは旧国軍親衛隊にその人ありと謳われた魔導將軍ルナ殿ですな。そんなぬいぐるみに身をやつされていても、感の鋭さはご健在のご様子」

上から降ってくる言葉を追って見上げると、月明かりを浴びながら電柱の上に誰かが立っていた。

目を凝らしてみると、月下とはいえひどく青白い肌に大きく吊りあがった口元と尖った耳が特徴的な、痩身の男がこちらを見下ろしている——妖魔!?

「おっと、接続を切ろうとしても無駄ですぞ」

妖魔が不敵に笑ってぱちんと指を鳴らす。

と、周囲の世界から一気に色彩が失われてゆく。

「封鎖空間！」

「ご名答。あなたに逃げられたのでは、こうして罠を張った甲斐がなくなる」

「罠!？」

思わず顔を見合わせるアタシとルナへ、妖魔は苦笑しながら告げた。

「正直、こっちも煮詰まってましてね。地上に出てきたはいいが、王子の消息はさっぱり掴めない。そこで、こうして魔法を使って派手に暴れていれば、王子を知る関係者がしゃしゃりでてくるだろうからそこを押さえようと。いささか頭の悪いやり方ですが、それだけこちら追いつめられてたのですよ。」

しかし、それも甲斐なく、そろそろ諦めようかと思いかけていた矢先に大金星だ。亡命者どもの首魁である將軍、あなたを捕らえられるとは！

妖魔は喉を小さく鳴らして嗤い、続ける。

「さあ、魔力回線は固定しました。後はその端末を押さえて逆探知すればあなたの本体に辿り着ける。そこに王子もいらっしゃるのですかな？」

「ちよつと、ルナ、どうすんのよ？」

さんざん偉そうな言つといて、何よこの様は——と、怒鳴り掛け、ルナの口元が邪悪に歪んでいることに気づいた。……いや、ゲーセンの景品レベルのぬいぐるみにそんな高尚なギミックが付いてるはずもないのだが、雰囲気的にそんな感じでってことで。

「雑兵」

ずけりとルナが言い放つ。これまでの子供じみたハイキーな少年声とは打って変わって、地獄の底から這いあがる魔王のような低音だった。

「戦場では口数の多い兵士から死んでゆくものだぞ」

「ようやく本性を出していただけるようすな、將軍」

妖魔もまた口の端を^はつり上げながら告げる。

「率直に申し上げましょう。エージェントとしての私の任務は王子を王国に連れ戻すこと。しかし、個人としての私がこの任務を志願したのは、あなた——將軍、あなたもまたこの地上世界にいと聞いたからです」

「ほう」

「覚えておられますか、將軍。エドレイト溪谷のリネ村」

「さて……？」

「深い雪に閉ざされた長い長い冬の終わりに、わずか数日の間だけ溪谷を埋め尽くす美しいリネの花——特産品といえばその根を煎じた葉茶ぐらいで、それを売って得るいくばくかの金だけが唯一の現金収入でした。後は地味の乏しい耕地を、村人皆が手を取り合って耕して、それでやっとつましい暮らしを維持していた、そんなたわいもない小さな村です」

遠く懐かしむような、優しく慈しむような、穏やかな声で妖魔が語る。……だがそこに、とことんろくでもない予感をひしひしと感じてしまうのは何故だろう？

ぎしぎしと音さえ聞こえそうな緊張感にアタシが^{すく}竦みあがっているその横で、神経を逆撫でするようなすつとぼけた口調でルナが首をひねった。

「はて、さっぱり思い出せんな」

「なるほど、あなたにとっては路傍の石くれを蹴り飛ばした程度の話なのでしょうな。しかし、私にとってはかけがえのない故郷だった——あなたの軍勢に焼き払われるまでは！」

妖魔はかつと両目を^{みひら}睜いた。

「田畑は踏みにじられ、男達は年寄りから幼子までことごとく^{くび}刎ねられた。家畜や女達も奴隸商人に売り飛ばされ、後には屍体と焼け落ちた家々しか残らなかった！」

「なるほど。北伐の際に行軍の途中で立ち寄った村のひとつか。思

い出せずにすまん。だが、お主の村が特別だったわけでもなくてな」
ルナは恐るべき台詞をさらりと口にした。

「部隊の後背の安全を確保するために、分離主義者どもに汚染された村はすべて『消毒』して通過することになっておつてな。後のことは知らん。占領した村落の経営は、兵站を任せた商人達の責任だ」
「……………」

それはおまえ、立派な戦争犯罪じゃねえか、と突っ込みを入れるには、あまりに重い空気にアタシはばくばくと口を開け閉めしていた。その割には、ルナの物言いには、ひと欠片の罪悪感も感じられない。どういう神経してやがるんだ、こいつ。戦争犯罪なんてでかす悪党は、みんなこうなのか？

あまつさえ、この外道なぬいぐるみは、こう言い放って話を丸めようとした。

「あれは戦争だったのだよ。当時の時代状況を無視して、くだらん倫理観など口にしても始まらんだろう」

もはや罪の意識どころか当事者意識すらあるのかどうかも怪しい、あっけらかんとした口調で、ルナは言つてのけた。

勘弁してくれませんか。いや、もう、本当。

「戦争？ 分離主義者？ 『消毒』だど？」

声に微かな震えが混じり始めた。どうやら妖魔の忍耐力は、順調に限界に向かって突き進んでいるようだった。

「あの村にまともな兵力なぞなかった。年寄りと女子供しかいなかったんだぞ。めばしい若者は近隣の領主に兵隊として連れてかれるか、街に出稼ぎして出払っていた。武器だって、鋤すきや鍬くわぐらいだ。

『分離主義』なんて言葉、理解できる者もいなかったろう。

……貴様のやったことはただの虐殺だ。一部の理もない」

「理ならある」平然とルナは応えた。

「ワシに与えられた任務は、北方辺境領で反動分離活動を行つている者たちを討伐し、王宮の威をもって地域の治安と統制を復することにあった。だが、疲弊した王宮から動かせる戦力は、このワシの

身ひとつ。金も兵員も武器も食料も、すべて現地で調達せざる得なかった。

だから、商人達の手を借りて資金と兵站を確保した。見返りに、奴らに利益が出るよう便宜を図ってやる必要があった。

現地で集めた兵の質は低かった。貴様のいう通り、ひとり一人の兵は貴様の村のような貧しい村落の出のものばかりだ。教養もない、大義など理解もできない。そんな寄せ集めの連中に武器を与え、人殺しの技を教え、体力を鍛え上げ、いざとなれば進んで死ねと命じる。彼らにも『見返り』は必要だ。大戦の前であれば、おおいぐさなおのこと、な。

だからワシは、一軍の長として、限られた資源で『北伐』リッスという事業を実現するために、必要な措置を取った。それ以上でもそれ以下でもない。——だから言っただろう、あれは『戦争』だったのだ」

「……………」

完全な確信犯かよ、こいつ。どんな大惨事を引き起こそうと、絶対に責任を認めようとしらない官僚の答弁を聞かされているような気分だった。いや、精神構造としてはまったく一緒なのだろう。畜生。何が「魔法の王国」だ。そこにもないなら、夢だの希望だのつてのは、どこに行けば手に入るつてのよ。

何にせよ、被害者が聞いて癒される話ではない。

「ふっ……ざけるっ……なっ！」妖魔は怒りに全身を震わせ、今にも破裂しそうだった。

「貴様のその手前勝手な理屈で、父も、母も、兄も、弟も、妹達も無惨に踏みにじられねばならなかったというのか？ 屍を野に曝かばねされねばならなかったというのか？」

「何を言う」ルナは鼻で嗤わらった。

「貴様とて、ここにくるまでにどれほど多くの命をその手で手折ってきた？ そこに理不尽な命令はなかったか？ すべての任務が納得のできる殺戮だったか？」

軍人だろうとエージェントだろうと、職業的殺戮に善悪の彼岸も

貴賤もない。ある種の政治的妥協の産物として任務があり、それを遂行する意志と行動があり、結果としての屍体が残る。それはいつの時代、どこの世界でも変わらん。そこにくだらん情動が紛れ込むのは、貴様が不出来な半端者だと白状しとるに過ぎん。そんな半端者に、このワシを殺れるとでも本気で思っているのか？」

何か、相手の方が可哀想になってきた。つか、完全にこっちの方が悪役じゃねえか。

「黙れ！ 黙れ！ 黙れっ！」

あ、切れた。

「殺す。貴様は殺す。貴様だけは、地の涯、はて天の頂、いただき冥界の奈落の底まで、どこまでも追い詰めて殺す。その依代よりしろから辿って、必ずや貴様の本体を見つけ出し、一寸刻みにその身を切り刻み、貴様の目の前でひと欠片つつ焼き尽くして殺す。絶望すら救いとなるほどに、ありとあらゆる苦しみとともに殺す」

「生憎だが、貴様には無理だ」ルナは断言してアタシを指差した。

「ここにおわすのをどなたと心得る。先代クイーンにその引導を渡した五人の聖戦士がひとり、マーキュリー殿よ。貴様ごとき雑兵なぞ、相手にもならんわ」

余計なことを言うな！ アタシは戦わないって言ってんだろが！

「なるほど、そうか。そういうことか。そういうことなのだな」

妖魔が絞るように喉を鳴らす。あー、嫌な予感がする。

「元はと言えば、貴様ら地上人がそ奴の口車に乗って、首を突っ込んできたのが諸悪の根源だ！ その所為で、その悪党が君臣面で王国の財政を喰い散らかし、挙句の果てに兵を弄んで全土を修羅の巷ちまたに引きずり込んだのだ！」

「ただの逆恨みのコジツケだよ、マーキュリー。気にしちゃだめだ」ころっと少年声に戻ったルナが、耳元で囁く。

おまえはもう黙れ。

もはやこの腐れぬいぐるみへの一切の信用を捨て去ったアタシは、胸の埋うちで吐き捨てた。こいつがアタシに話して聞かせた内容は、ほ

ば確実に、自分に都合良く事実を捻じ曲げたものに違いない。はっきり言って、人間性という観点では、目の前の妖魔の方が遥かに信頼が置ける気がする。……どうもひしひしと感じる殺意だけが、相互理解への大きな障害ではあったが。

「何でもいい。これ以上、ぐだぐだと話を続けても始まらない。女！

まずは貴様から死ね！」

うわ、やっぱりそう来たか。

「己の無責任な行動が何を招いたか、じっくり地獄で顧みるがいい！」

そんなことを言われても、はいそうですか、とは肯けない。目の前の妖魔をはじめとする王国の人々の辿った不幸な運命には、真実、胸が痛む。しかし言っちゃ何だが、アタシの所為じゃなからう。年端もいかない少女達を騙くらかして、地域紛争の手駒として使ったその下衆なぬいぐるみにこそ怒りの矛先は向かうべきで、何だったらアタシも手を貸してもいい。……………。

などと、そんな主張をのんびり口にする暇などあるはずもなく。

電柱の上で、妖魔が高く掲げた右腕を鋭く振り下ろす。高周波の風切音。鞭のようにしなやかに伸びたその爪が、斬撃となってアタシに襲い掛かる！

とっさに路上に転がって紙一重でその攻撃を避けたものの、背後では分厚いコンクリの壁とベスパがチーズのようにきれいにスライズされていた。

「な、な、な、な——っ！」

自分でも何を言っているのか判らない。「ベスパ」「全損」「弁償」といった単語の編隊が、爆音も高らかに頭の中を旋回する。いや、バカ。そうじゃないだろ。借りたバイクでも保険って効くのかしら。違う、そうじゃなくて。こうなったら、意地でもこのスクープを金にして。だからバカ、そっちでもない。

いいから、とにかく、今はただ——

「逃げろ！」

自分自身に言い聞かせるように大きく叫ぶと、アタシは路上から跳ね起きて脱兎のごとく駆け出した。

自分なりに全速力を出しているつもりではあったが、背後の風切音やら得体の知れないど派手な破碎音やらは一向に遠ざかってはくれず、それどころか着実に距離を詰められている気配すらあった。

一方、こっちはこっちで日頃の不摂生がたたってか、二〇三〇メートルもいかない内に、もう顎が出始めた。こういう時のための機動力^{ベスバ}だったわけだが、それを真っ先に潰されたのでは話にならない。今度こそ真剣に煙草をやめようと心に誓いながら、一歩づつ重くなる脚を意地と根性で跳ね上げて走り続ける。

その横を、空気抵抗なぞまるっきり無視してふよふよと漂いながら、ルナが流れてゆく。

生まれてこのかた、この時ほど真剣に殺意を覚えたことがないというくらい憎しみを込めて睨みつけてやると、少年声のルナが変身ヒロインのマスコット面して叫んだ。

「変身するんだ、マーカーリー！」

「イ・ヤ！」アタシはきっぱりと拒絶した。

「絶対にイヤ！ 死んでもイヤ！」

「でも、このままだと一撃でも喰らったら即死だよ」

「……………」

再び風切音。首筋をちりりと何かが走り抜ける。遅れ髪を何本か持ってかれた感覚があった。

「変身すれば、スーツの防御力で二〇三発くらいは持つんじゃないかな。まあ、当たり前どころにもよるけど」

変身ステッキを中空でくるくる廻しながら、涼しげにルナが解説する。

事ここに至り、ようやくアタシは確信した。妖魔の罠なんかには嵌められたんじゃない。それを見越して、こいつがアタシを嵌めたのだ！

そこまでしてアタシを変身させたいか、この野郎！

「もういい、判った。こっち寄せ！」

「やったー！」

はしゃぐルナを無視して、変身ステッキをもぎ取ると、アタシは走りながら高く掲げて呪文を叫んだ。

「マーキュリーパワー、チェンジアップ！」

くそ、恥ずかしい。すごく恥ずかしい。二七にもなって「魔法の呪文」なんか大真面目に叫ぶはめになるなんて。畜生。

羞恥に震えるアタシの身体を、青い光が包んでゆく。全身を、どこからか吹き上がってくる圧倒的なエネルギーが満ちたしてゆく。久しく忘れていた、ある種のエクスタシーにも似た感覚。あー、そりゃあ、中学生でこれを覚えたら、病みつきになるわな。

やがて光が消え去ると、あの頃と寸部変わらぬ、フィギュアスケートの選手のユニフォームと超ミニのセーラー服を併せたみたいなの、全身ピッチリのコスチュームに身を包んだアタシがそこにいた。

しかし、きつい。多少は伸縮するようだが、本当にサイズはあの頃のままなのか。さすがに一四歳の頃に着ていたものをそのまま着るのは、いろんな意味で無理があった。胸も腰もきつかったが、何よりウエストが一番きつい。こんな服にまで日頃の不摂生を責められているようで、何だか腹が立ってきた。

だいたい、この手のコスは未成熟でスレンダーな身体で着るからかろうじて変身ヒロインとしての品性が保たれていたのであって、成熟した大人の女性に無理やり着せたら、たちまち場末のコスプレキャバクラか、安いアニコスもののAV嬢に成り下がってしまう。痛い。どこをどう解釈しても、痛すぎる。

かくなる上は、この姿を目撃した人間はすべて抹殺するしかない。アタシは非情な決意とともに立ち上がった。

「ようやく変身したか、聖戦士よ。だが、ひとりでこの俺に――」
「やかましい」

相変わらず電信柱の上からの見下ろし口調の妖魔にステッキの先

を突き付け、アタシはぴしゃりと言つてのけた。

「今からぶっ飛ばしてやるから、そこで黙って待ってろ」

一四歳の頃のアタシだったら、とても口にできなかったようなドスの効いた台詞を叩きつける。

「マーキュリー、嬉しいよ。君もようやく——」

「おまえも黙れ」横に浮かぶルナを睨みつけ、訊ねた。

「そんなことより、ルナ、飛び道具は？」

「ないよ、そんなもの」

「はあ？ いや、だって、頭のティアラ飛ばしたり、ビームみたいな発射したり、いろいろあったでしょうが？」

「だから、それはアニメの方だって」

「……えーっと、それじゃ、アタシたち、どうやって敵を斃^{たお}してきただけ？」

壮絶に嫌な予感が脳内を駆けめぐったが、一応、念のため訊いてみた。

「そのステッキで撲殺——」

「ふざけんな！」

振り抜いたアタシのステッキはルナの真芯を捉え、豪快なホームラン軌道で冬の夜空へとかっ飛ばした。

もういい。あんなのを当てにしようとしたアタシがバカだった。

「なんだ、もういいのか？」妖魔が訊ねる。

前言撤回。よくない。全然、よくない。まったく、よろしくない。殴り倒すにしても、リーチの差はいかんともし難い。二、三発喰らうの覚悟で懷に飛び込むか。他の選択肢はなさそうだが、当然、向うもそれは予測しているだろう。素直に殴られてくれるとは思えない。

逃げるか——駄目だ。封鎖空間は、それを仕掛けた人間が自分の意志で解くか、そいつが斃^{たお}されない限り解除されない、ってことだったはず。かっ飛んでいったルナのことを見向きもしないのも、どうせ後で捕まえれば済むとも思っているからだろう。つまり、ど

ここまで逃げても、こいつの掌の上^{てのひら}で上ってこと。

やるしかない。やるしかない。やるしか、ない。

アタシは手元のステッキを握りしめ、呪詛のように繰り返した。くそ。機械化された米軍陣地に、バンザイ突撃しか思いつかなかった旧日本兵みたいな気分だわ。

「覚悟は済んだか？」

「うっさい！ バーカっ！」

アタシは顔を上げて怒鳴った。

誰が覚悟なんかするか。おとなしくやられてなんか、やるものか。相手がどんな苦勞をしたかなんか、知るか。アタシの所為だと、こじつけるんなら好きにしろ。

男に逃げられて。

家財道具も売っ払われて。

安い給料で毎日遅くまでこき使われて。

少女の頃の夢なんて、日々の生活に押し流されて、もう思い出せもしないけど。

だけど、だからこそ。

こんなトコロで、クタバって、タまるカ！

「こおんちつくしよお！」

ヤクザ映画の鉄砲玉みたいに腰だめにステッキを構えて、妖魔に向かつて呐喊^{とっかん}する。

が、それを見た妖魔がにたりと嗤^{わら}うや、千手観音よろしく背中から無数の細長い腕が一気に溢れ出てきた。その一本いっぽんの先が、例の鞭のように伸びる指だか爪だかと同じになっていることを即座に理解したアタシは、どこか他人の声のような虚ろな響きで呟いた。

「いや、それは反則——」

「死ね」

妖魔は短く告げ、無数の超音速の斬撃が暴風と化してアタシに襲い掛かってきた！

スーツによって感覚が強化されたためか、はたまた今際^{いまわ}のきわの

何とやらか。自分めがけて雪崩落ちてくる斬撃のひとつひとつを、アタシは正確に把握できていた。それらすべての軌道が、アタシの身体をナマス切りに切り裂いて、瞬時に細切れの肉片にしようとしていた。

それが判っていないながら身体が動かない。いや、動いてはいるのだが、高速で襲いくる斬撃と比べてあまりにも遅かった。つまるところ、急速に砥澄まされたアタシの知覚は、絶対的、不可避的に迫る「死」の瞬間と無理やり向き合わされる以外の何の役にも立っていないかった。

ダメだ、死――

「簡単に諦めるな、マーキュリー！」

不意に身体がふわりと浮かび、横に流される感覚を覚えた。視界の片隅で、さっきまで自分のいた空間めがけて、周囲のブロック塀や電柱、路面のアスファルトなどを易々と捲き込みながら、斬撃が雪崩込むのが見えた。自分が誰かにタックルされて、横っ飛びに吹っ飛ばされているのだと理解できたのは、だいたいその辺のタイミングだった。

そのまま勢いが止まるまで、もつれあったまま路上を二〜三回転する。あちこち擦り剥きながら、ようやく動きが止まると、アタシを助けてくれたその人物はすぐに身を起こして訊いた。

「大丈夫かい、ア……いや、マーキュリー！」

一瞬、別の名前で呼ばれかけた気もするが、そんなことより、男の格好の方が問題だった。

漆黒のタキシードに純白シルクのドレスシャツと真っ赤な蝶ネクタイ。背中には黒い厚手のマントをまとい、頭には背の高いシルクハット。柄頭には大きなクリスタルをあしらったステッキを持ち、目許はマスクで隠されている。

敢えて当人の名乗りを待つまでもなく、「タキシード王子」本人だった。

……改めて今見ると相当にきついんだけど、中坊の時はこれを「

「かっこいい」とか思って、本気でときめいちゃってたりしたんだよなあ。若さだよなあ、やっぱり。」

などと、半ば呆れつつぽかんと見上げるアタシの手を取り、タキシード王子はアタシの身体を引き起こす。

「よかった。大丈夫そうだね」

そう言って優しく微笑むと、タキシード王子はばさあっと大業にマントを翻し、妖魔の方へ振り向いた。

「争いはやめるのだ、王国の戦士よ！ レディーに手を上げること、それもかつて王国の危機を救ってくれた大恩ある彼女へ危害を加えるなぞ、この僕が許さない！」

「これはこれは王子。よもやこのような場でご尊顔を拝する栄誉に浴するとは、恐悦至極」

妖魔もまた、胸に手を当てて恭しく一礼する。

「君にも立場があることは分かる。だが、これは本来、我々、王国の人々の間で決着をつけるべき問題ではないか。異世界である地上の人々を捲き込むことなぞ、許されるはずが——って、あの、ちょっと、ア……マ、マーカーリー？」

「いや、いいから続けて」

いきなり現れて妖魔に説教かまそうとするタキシード王子の顔を、アタシはすぐそばまで寄ってしげしげと眺めた。

「いや、そんなこと言われても、そんなそばで見られてたら、何かやりづらいって言うか、その……」

言いながら、頬なぞ染めて視線を逸らす。声とこの辺の仕草でもうだいたい見当が付いたので、アタシは王子のマスクを無造作にひっ剥がした。

「あ、ダメ、返して——って、ああっ！」

「なあゝにゝが、『返して』なのかしら？」

アタシは我ながらかなり引きつった無理やりな笑みで、目の前の男の名前を口にした。

「マモルさん」

まずはちょっとそこ座れ、と。

はい、とおとなしく、家財道具売り払ってアタシを捨てた男は、アスファルトの上にちょこんと正座した。

「……あなた方、そこで何してるんですか？」

うっさい！ 他人が口挟むな！

「いや、いいんです！ いいんです！ ちょっとプライベートな話なんです。家庭の事情って言うか、そんな感じですよ。すぐ済みますから。すぐ済んで、そっちの方に戻りますんで、もうちょっと待っててください！」

とても一時は一国の国家元首だったとは思えない腰の低さで慌てて妖魔へフォローすると、マモルは素早くこっちに向き直った。

「や、アミさん、これにはですね、これには、その、いろいろ複雑な事情って、いいですか、ですね——」

しどろもどろになりながら、マモルが必死で言葉を探す。

面倒くさくなったので、アタシは突き放すように言った。

「だいたいその辺の話は、ルナとそこの妖魔さんから聞いた」

「そうですか。そうですか。あ、すいませんね、何か説明みたいなこと、してもらっちゃってみたいで」

「いえ、別に私はそんなつもりでは……」

「そこで礼を言っただうすんのよ！」

「そうでした。そうでした。……で、何を話せば、良いんですしたっけ？」

アタシは問答無用でステッキをマモルの登頂部に打ち下した。

「……痛いですが、アミさん」

「痛くしました。はい、何を話せばいいか、思い出した？」

「えーっ、と——」

しばらく考えてから、マモルはがばっと両手を前に出して土下座した。

「ごめんなさい！」

よろしい。まずはその一言からよね。

で、アタシの家財道具は？

訊ねると、マモルはおずおずと懐からしわくちやのマニラ封筒を差し出した。

中を見るとよれよれの万札二枚に、千円札が数枚。後は逆さになると、少額のコインがいくつか手元に転がり出てきた。

……これで、全部？

「いや、元からあんまり高く買い取ってもらえなくて。それにホテル代って、結構するんだよね。あと、食事したり、とか。あ、そうそう、前に着てたスーツ、さすがにもうちょっとね、着れないかなって思っ、新調してさ。いや、このスーツなんだけどね。似合うかな、どうかな、なんて――」

あはははーっ、と笑って誤魔化そうとするが、アタシが冷たく一瞥すると即座に首を竦める。

「いや、すんません。本当、すんません」

「……で、それだけ？」

「あとは、その。だいぶ減っちゃったから、ちよつと増やそうかな、なんて……」

それでパチンコ屋にでも行って、残りはスったと。

アタシは深々と溜息をついた。見事に予想通りの使い方しかしない奴だ。怒るより先に呆れる気力すら沸いてこない。

にしても、その程度で使いきれるほど、買取額が安かったのか。

確かに高額商品なんてパソコンとこないだ買い換えたばかりの液晶テレビくらいだったが、それにしたってあんまりだ。こいつの知恵の足らなさ加減を見て、足元見られたんじゃないかなろうか。後で業者突きとめて、怒鳴り込んでやる。

ま、そんなことより。

「何でこんなことしたの？」

しゃがんでマモルの顔を覗き込みつつ訊ねる。何となく我ながら、

中学校の女教師が問題児の生徒をここで放り出すべきかどうか真剣に判断つきかねているような声にも聞こえなくもない。

「いや、ルナが、さ」

「ルナが、何よ？」

「何ていうか……、あっちでの経験で、ルナって僕がそばにいと、いろいろ余計な気を廻してろくなことしないって分かってたから、こっちに来るやすぐにルナの元から逃げ出して。それで今の住所も教えてなかったんだけど、どこでどう見つけたのか、こないだウチを訊ねてきてさ。それで『面白い状況になって参りましたぞ』とか、また不穏なこと言いだして。で、このままだとあっち同様、わやくちやなことになるのが目に見えてたから、ルナがおかしなことをしでかす前に、身を隠そう、と」

「ちよっと待った。あんた、あの妖魔から逃げてたんじゃないの？」

「え？　だってまだルナ以外の向うの人間には見つかってなかったもの。それ以外に、理由はないよ」

「……………」

あー、ようやくと、話が見えてきた。

要するにルナもまた、その妖魔同様、こいつを利用しようとして逃げられたのだ。それで一緒に暮らしていたアタシに張り付いていれば、その内、のこのこと顔を出すだろう、と。そう考えたのだろう。

「で、そうは言っても、先立つものがなかったので、手っ取り早く家財道具売っ払って金を作ろうとした、と」

「うんうん、そんな感じ」

凄いきついと手まで叩きそうな勢いのマモルをひと睨みして黙らせると、どっと疲れを覚えてがっくりと頭を下げた。

「だったら、一言相談してくればいいことじゃない。そりゃあ、あんたに金を持たせると、すぐにパチンコでスったり、近所の子供にメシ奢ったりですぐ使っちゃうからって、持たせなかったアタシも悪いよ。だけど、いきなりいなくなれるくらいだったら、お金

ぐらいいくらでも工面するわよ」

いや、まて。何口走ってんだ、アタシや。台詞だけ聞くと、男に自ら進んで金を貢いで騙される、典型的な頭の悪いだめんず女みたいだぞ、おい。

だが、マモルは首を横に振った。

「ダメだよ。アミは記憶を封印されてたんだから、本当のことを話しても信じてもらえない」

「だったら、封印を解けばよかったでしょ。現に今のアタシはルナのおかげで、あの頃の記憶を取り戻しててるじゃない」

「そんなことをしたら、アミを捲き込んでしまう。そうしたくなかったから、僕は黙って逃げようとしていたのに」

マモルはそう言って、苦しげに眉を顰めた。中身はアレでも、血筋と見かけは一級品の美形だ。その辺の安っぽいイケメンなど、足元にも及ばない。その美形が、真摯にアタシの身を案じて胸を痛める姿に、思わずくらっといきかける。い、いかん。このまま何もかも許してしまいそうになって、かろうじて理性で踏みとどまった。

「べ、別に、もっともらしいウソでも何でも、つけばよかったじゃない」

「アミには、ウソなんかはつけないよ」

や、や、や。そーゆー問題じゃないだろう。

つか、落ち着け。いいから、落ち着け。冷静に、落ち着け。

どんなにこいつの見た目が美形でも、中身は三〇過ぎのオッサンなのだ。それも適当に言葉で人を納得させることもできず、端金はしたかねを作るのにいちいち家財道具を売り払うくらいしか思いつかない。しかもその金の使い方が、アレだ。計画性ゼロ。生活力ゼロ。将来性ゼロ。

それで口を開けば、こんな今時、中学生だって口ごもるような、どストリートな台詞をてらいなく口にしやがる。——畜生、こいつの場合、本当に「裏」がないって分かるのが、始末に負えない。

人間、自分に向けられた純粋な好意を前にして、なかなか拒絶の

意志を貫くことは難しい。ましてや、何だかんだ言って二年も一緒に暮らしてきた男なわけで、それなりの情の繋がりを否定しきれない。

うう。もう客観的な材料はすべて「いい機会だから、これに乗じて別れちまえ」という結論を指し示しているのに、こいつが本気でアタシを捨てたんじゃなかったこと、そしてまたふたりで暮らせるかもしれないことが、素直に嬉しくて、自然と頬が緩んでくる。

や、だから、ダメだって。こんなところで甘い顔みせちゃ。

アタシはぐつと堪えて、続けた。

「か、家財道具売り払った件は分かった。でも、じゃあ、何であんた、ここにいるのよ。こんなところに出てきたら、せっかく逃げた意味がないじゃない？」

「ルナがアミを捲き込んだから」あっさりとマモルは答えた。

「こつちの世界で君たちが変身すると、誰がどこで変身したか、僕にはすぐそれが判る力がある。あらゆる空間状況を問わず、そこへ『跳ぶ』力も。街でふたりの姿を見かけた時点でルナの狙いは見当がついたけど、結局、こうなるまで手が出せなかった。ごめん」

……そーか、それであんなにアタシを変身させたがってたのか、あの腐れぬいぐるみ。畜生。

「それだけ判ってて、何でそのまま逃げなかったの？」

答えなんか訊かなくても判っていたけど、あえて訊ねたのは、たぶんアタシも理由を必要としていたからだ。

まっすぐな瞳でアタシを見返すマモルは、それを察したように優しく微笑んで言った。

「君が戦っているとき、そばで守るのが僕の役目だ」

その言葉を聞いたとき、アタシの中で頑なに存在していた塊が、暖かく解けてゆくのが判った。

それは昨日今日の話だけじゃない。誰にそう言われたわけでもなく、この街で生きてゆくにはそう在るしかないと思い定めて、疑問に思う気持ちを幾度もいくども呑み込むことで、いつしかアタシ自

身でさえそれが本当の自分の姿のように錯覚していた、そんな硬く、冷たい強張り――

そう、ずっと忘れていた。

アタシはひとりで戦わなくなっちゃったっていいのだ。

「バ、バカ……そんな台詞、真顔で言ってるじゃないわよ」

アタシは横を向いて、不貞腐れたように口にした。

たぶん、ちよつと涙ぐんでた目元を見られたくなかったから。

「……さて、そろそろよろしいですか」

咳払いひとつして妖魔は言った。

「王子、ひとつ提案があります」

「何でしょうか」

マモルは立ち上がりつつ、答える。アタシも慌てて立ち上がった。「ご要望通り、そちらの女性は見逃しましょう。しかし、その代わりあなたにはこのまま王国にご同行いただき、ルナ將軍の身柄も引き渡していただく」

「その回答はNOだ。どのような形であれ、僕の帰還は王国のためにならない。少なくともルナは、僕の帰還という状況を最大限に活かして、王国の各層への大規模な不安定化工作を仕掛けるだろう。」

ディスタビライズ・オペレーション

そもそも二人の王女の権力抗争の焦点が、何故、僕なんだ？ 地上に亡命以来、何の政治的活動もしてこなかった僕は王国ではもはや過去の遺物でしかないはずだ。そんなものを巡って奪い合いするより、もっと現実的なイシューがいくらでもあるだろう。それなのに、君のような工作員をわざわざ地上世界こちに送り込んで、無茶な作戦行動まで許可するほど熱くなっている。おかしいとは思わないのか？

既にこの状況自体、ルナによってデザインされた絵図の中だと、何故、気づかない」

「……………」

マ、マモルがまともに難しい政治の話をしてる。アタシはびっくりしてぼかんとその横顔を眺めていた。

そりゃあ、曲がりなりにも内戦下の国家元首なんてやってたんだから、アタシが考えてたほどのぼんくら君主ではなかったのかもしれない。そういや、さっきもルナを出し抜いて逃げ出したって言ってたっけ。しかし、それじゃあ、アタシの知る日常でのヘタレ男っ

ぷりは演技だったっていうの？　とてもそうは見えなかったけど……。

いや、まあ、仕事絡みの時だけ、まともな男っているけどさ。

って、待て。ちょっと待て。

そっちに気を取られてたけど、今、マモル、何だった？

「王子、そうであるならなおのこと、ルナ將軍の身柄を差し出していただきたい」

「ダメだよ。ルナの居場所は僕でも判らない。この三〇年、彼の実体を見たものはいないんだ。おそらく、さっきのぬいぐるみを辿っても、辿り着けるのはダミーの中継蟲ルータバグくらいだろう。先代のクイーンが一〇〇人の高僧に追跡させたときには、逆にそのうち半数の魔術回路を灼いて再起不能にしている。君や僕のレベルでどうにかなる相手じゃない」

……そもそも何者なんだ、ルナって？

とりあえず、「諸悪の根源」はあのぬいぐるみ、つー認識でいいのか？

「であれば、やはりご自分の口から、我が主あるじにお伝えいただくより他にありませんな」

「だから――」

「王子、あなたは誤解しておられる」妖魔は静かに言った。

「私が主あるじに命じられた任務は、『万難を排して、あなたを主あるじの下へお連れしろ』というものです。それ以上でも、それ以下でもない。

あるいは、あなたのおっしゃる通り、この任務は誰かの書いた絵図に踊らされてのものかもしれない。そして、あなたを連れ帰ることが、その者の企図する謀略の手助けとなってしまうのかもしれない。

だが、前線の兵士が任務の裏読みを始めては組織の統制は維持できない。

逆にお伺いしますが、どうあってもご同行はいただけませんか？
「マモルは再び首を振った。」

「さっきも言ったように、僕の帰還は王国のためにならない。

それに、僕は地上世界こくに残ると決めた。彼女と生きてゆくと決めたんだ」

マモルはアタシの肩を抱き寄せる。その手が微かに震えていることに気づき、何も言わずに自分の手を重ねた。

妖魔はその手を見て、それからアタシの目を見て訊いた。

「貴女あなたの意見も同じとみなしていいんですか？」

「まあ……ね」

正直、怖かった。すぐにでも逃げ出したかった。

どんな敵を前にしても、凛々しく可憐に立ち向かっていた、無敵のスーパーヒロインだった少女の頃の自分なんて、今となってはとも思い出せない。

アタシはあれから、傷を負うことも、その痛みも知った。大切なものを得て、それを喪うことも知った。そして、胸の底に穴が開いたような喪失感がどれほど苦しいかも、その苦しみさえ日々の忙しさの中でいつしか麻痺して何も感じなくなることも知った。

つまるところ、アタシもそれなりに大人になったということなのだと思う。

だけど、だからこそ。

自分が守りたいもの、手離したくないものがあるなら、逃げるわけにはいかないということを知ったのだ。

……いや、まあ、それがこれだったのは、我ながら忸怩たるものがなくはないけど。

「そうですか。残念です」妖魔は口だけでなく、本当に残念そうに頷いた。

「では、ゲーム再開、といきますか」

その台詞とともに、妖魔は細い糸眼をかつと瞋みひらいた。

と、大気が妖魔の方に向って流れてゆくのが判った。いや、違う。この感覚は魔力の流れで――

「いかん！ 君のレベルでそんな術式を、それも魔方陣もなしに略

式で——！」

「あ：あなた方の長話につきあい過ぎました。少々、決着を急がねば」

苦しげに告げると、いきなり妖魔の体？が倍以上に膨らんだ。上半身の衣類が弾け飛ぶ。その下から、奇怪な線で彩られた刺青のようなものが浮かび上がる。それらは生き物のように肌の上でうねり、無数の目を思わせる紋章を全身に描き出した。

「げっ！ 気色ワルっ！」

「マーキュリー、術式が本起動する前に叩くんだ！」

ステッキの先を妖魔に向け、マモルが命じる。

「え？ な、何——っ！？」

「もう遅い」

にいと妖魔が嗤い、刺青の目が一斉に大きな瞼を開く。その下から生身の瞳の水晶体がぎょろりとこちらを睨む。

「——っ！」

「下がれ、マーキュリー！」

あまりに異様で邪悪な状景に、声にならない悲鳴を上げて立ち竦むアタシを、マモルが背後に引き倒す。

同時に妖魔の全身の瞳が閃光を発し、次の瞬間、アタシ達の周囲の空間が爆発した。

「おおおおおおおおおっ！」

ステッキの柄頭を前方に突き出し、マモルが叫ぶ。見れば、その前方に半透明の光の壁が形成され、その先で何もかもが光を放って粉々に爆散してゆく。まるで絨毯爆撃のど真ん中に放り込まれたような有様だった。

無限に続くかと思えた時間は、やがて唐突に止んだ。

顔を上げると、周辺はすっかり更地になっていた。

その光景に啞然としてアタシは呟いた。

「マジか……」

「な、なんて無茶を……こんな術式を無理に発動すれば、君の魔術

回路が持たないぞ」

肩で息をしながら訊ねるマモルに、妖魔もまた苦しげに言葉を絞り出す。

「しかし、これで貴方もその彼女を連れて、この空間を突破する余力はなくなったはず。王族の空間跳躍力を封じるためなら、安いものです。更に言えば――」

刺青の紋様が再びうねりを帯びて、今度は胸に大きなひとつ目が^{あらわ}顕れる。瞼が再び開いてこっちを睨む。

「こっちにはまだ、余力がある」

「く……っ」

小さく呻いてマモルが膝をつく。

「マモル！」

「もう一回来る」 駆け寄るアタシの腕を掴み、マモルが短く告げた。「彼の狙いは僕の身柄の確保だ。ここへ来るのと今ので僕は魔力を使い果たした。魔術防壁がもう出せない以上、今度はアミを直接狙い撃ちしてくる」

「ちょ、ちょっと！」

「大丈夫だ。思い出せ。魔力の流れを読んで、意識を集中しろ。身体がそこについてくる」

「あのね、こっちだって十代じゃないんだから、そうそう昔みたい――」

「変身したろ？」 マモルはウインクして笑って見せた。

「スーツの機能で、君の身体の中で人工的に魔術回路が形成されている。その魔術回路が神経情報処理と身体機能を補強してくれる。君が望めば、更にその先もだ。信じる。君の意志に必ず身体はついてくる」

それからマモルはぐつとアタシの身体を抱きよせ、耳元で囁いた。「チャンスは僕が作る。隙を衝いて懷に飛び込め。ステッキに魔力を込めて叩きつけるんだ。それで彼の魔術回路はオーバーロードして灼き切れる」

「ちょ、そんなの無理——」

「時間切れだ。アミならやれる。大丈夫だ」

手短にそれだけ告げると、マモルはアタシを突き飛ばす。

そこへ妖魔の胸の瞳から一条のビームが走る。ついさっきまでアタシの居た空間を縦に切り裂くように光が薙いだ。ビームはそのまま后背の地面を抉る。ざっくりとした溝の深さを視界の片隅に留め、背筋を悪寒が駆け抜けた。

「逃すか！」

そのままビームがアタシを追ってくる。冗談じゃない。追いつかれてたまるか。

走り出しながら、だが、確かにマモルの言うとおり身体の軽やかさを感じていた。変身前の運動不足を痛感していた自分と同じ身体とは思えない。

そして魔力の流れ。周囲の空間から妖魔の下へ「風」が集まり、ビームの形に収束してこちらへと返ってくるのが何となく解る——この「風」が、たぶん魔力の流れなのだ。

この流れの揺らぎが妖魔の攻撃とリンクしていることも、感覚的に判る。その先も「読め」なくもない。そこへ身体を滑り込ませるように押し込んでやることで、髪一重でアタシは妖魔の攻撃を回避していた。

いや、これは……いけるか、も——

一瞬、調子に乗ったそこへ、髪の毛数本を捲き添えにして左の耳たぶをビームが掠め飛ぶ。畜生。世の中、そんなに甘くないか。

それでも逃げ廻ってる分には何とかなりそうだったが、マモルの言うような懷に飛び込むような隙はどこにもなかった。妖魔も瓦礫の山と化した路上に飛び降り、走りながら攻撃位置を変えてくる。ビームだけでなく、最初に見せた鋭利な鞭のような攻撃も交えてきた。これは躲し損^{かわ}なうか、体力が尽きたらお終いだ。飛び道具が使えない以上、こっちが圧倒的に不利。

しかし、マモルが言ってた「隙を作る」ってのは一体……？

その時、足下の瓦礫につまづいたのか、ほんの刹那、妖魔がその場でたたらを踏んだ。

そこへ、死んだように路上に倒れ伏していたマモルが素早く身を起こすと、薔薇の花を放つ。何らかの魔力が込められているのか、重心位置とか空気抵抗を無視して、薔薇が枝の先から鋭く、まっすぐに妖魔に向けて突っ込んでゆく。

しかし、目標へとたどり着く前に、薔薇は妖魔の腕のひと振りで弾かれてしまう——そう。だけど、そこに片腕分の「隙」ができた！

「うわああああああっ！」

アタシは獣のような咆哮とともに、その「隙」に身体を振じ込むように呐喊した。

妖魔もその動きに気付き、身体をこちらに向けようとしている。

その動きをスローモーションのように知覚しながら、じれったくなるぐらい重い身体を強引に前へ、前へと押し込む。超音速の鞭と化した腕のひとつが、こっちを貫く軌道に乗ろうとしている。胸の光線を発する奇怪な瞳も、アタシの姿をその焦点に結ぼうとしている。

失敗した。間に合わない。……今度こそ、殺られる！

「大丈夫だよ」不意にマモルの声が聞こえた。

「アミなら、きっと大丈夫」

その暖もりを伴った言葉を意識した瞬間、自分の中の冥い強張りくらこわばが消し飛ぶのが判った。

そして背中を押されるように、アタシの身体はぐっと加速を増す。そう。アタシが望めば、その先だって——

「バカな!？」

「行け、マーカーリー！」

妖魔の驚愕。マモルの声。

そしてアタシは、振りかぶったステッキにすべての想いを込めて、フルスイングで振り抜いた。

「……お見事です」崩れた壁面に背をもたれ、妖魔は微笑んだ。

「貴女の力を少し甘く見ていました。敗因はそこですね」

「すぐに封鎖空間を解除するんだ」勝ったはずなのに、命じるマモルの表情の方がよほど辛そうだった。

「ここまでの戦闘と彼女の今の攻撃で、君の魔術回路はずたずたになっっているはずだ。そんな状態で封鎖空間の維持なんて、負荷が大きすぎる。激痛でのおうちまわっていてもおかしくない。今すぐ術式を解きたまえ」

妖魔は目だけをマモルの方へ向けた。憔悴しきった顔。元の大きさに縮んだ全身は、赤黒いあざで覆われている。きっと皮膚の下で内出血を多発しているのだろう。

だが、表情だけはひどく穏やかに、妖魔は答えた。

「嫌です」

「何故だ？」

「まあ、ちよつとした意地ですね。ここで封鎖空間を解いたら、ルナ將軍を逃がしてしまう」

「それなら元から意味はない」マモルは首を振った。

「個人レベルで展開した封鎖空間程度、彼には何の障壁にもならない。効いた振りをしてみせたのは、彼女と僕を嵌めるためだ」

「何だ、やっぱりそうか——っ！」

不意に妖魔がむせ、口から大量の血を吐いた。

「大丈夫か！　しっかりしろ！」

「内蔵をやられましたか。これは参ったな」

「だから、早く封鎖空間を——」

「ならば、私を殺しなさい」

「……………っ！」

凍りつくマモルに、妖魔は静かに続ける。

「地上世界で貴方の身柄確保という非合法な重要任務に失敗した以上、私は王国に戻れば肅清される」

「ありえない。君がどちらの王女の部下なのか知らないが、たとえ失敗したとしても、地上世界での経験は貴重なはずだ。君が肅清されねばならない理由などない」

その否定に、妖魔は小さく鼻を鳴らして答えた。

「それがそうでもないですよ。このところの我が主は、熾烈な権力闘争の影響か、激しい猜疑心に捉われるようになっていてね。失敗云々はまあともかくとして、自分の部下が死んだことになっている貴方と接触したなどと外部に知れば、誰にどう利用されるか判らない。おそらく、このまま戻れば処分されるでしょう」

「……僕の知るふたりの王女は、御母堂同様、どちらも周囲の人々を慈しむ心優しい姫だった」

「私の知る主も、戦火に焼かれた村々を巡り、復興に力を注がれた心優しくて勇敢な姫様でしたよ。奴隷商人に売られた妹を救い出し、死者を弔った墓碑の前で声を上げて泣いてくださった。心が凍りついて泣くこともできなかった私と妹は、そこで初めてやつと『泣く』という感情を取り戻せた。その日以来、私はあの主のためにこの身を捧げることを誓ったのです」

「だったらなおのこと、こんなところで死んでどうするんだ！」

「さっきのルナ將軍の話」マモルの言葉が聞こえているのかどうか、妖魔は独り言のように言葉を継いでゆく。

「ええ、そうです。私のこの手も汚れている。任務遂行のために軍人や兵士だけでなく、民間人も殺してきました。子供もね、潜入工作の際に姿を見られて、殺しました。ばれれば部隊が全滅ですからしょうがなかった。あの頃の私と妹くらいの年頃の子供たちで。部下にやらせるわけにはいかなかった。だから、この手で殺した。畜生。しょうがなかった。しょうがなかったんだ！」

うつむいて叫ぶ妖魔は、あるいは泣いていたのかもしれない。「判っています。ルナ將軍と同じだ。あの男が私の村を焼いたのと

同じロジックに、私も、そして我が主^{あるじ}も、いつしかどっぷり漬かり込んでいたんです。畜生。何をやっているんだ。何で俺はこんなところにいるんだ？」

妖魔は顔を上げ、マモルを見た。

「王子、あなたは変わらない。何もかもが変わってゆくのに、あなたひとりが変わらない。今も自分を襲った私のような者の身まで案じている。何故です？ 何故変わらないままなのです？ 世界がこれほど破壊と猜疑と絶望にまみれているのに、あなたは何故変わらぬまま、無垢なままでいられるのです？」

今にして思えば、あなたの政権が長続きしなかったのも当然だ。

先代クイーンの治世で生きてゆくために世俗の悪徳にまみれてきた人々にとって、あなたの存在はまぶしすぎた。あなたの存在自体が、人々にとって激烈なまでの断罪だった。だから、みんなおかしくなったんだ」

「……僕は……」

「王子……」

妖魔は哀しげに笑いかけた後、不意にぐいとマモルの身体を抱き寄せ、刃に変形させた腕をその首筋に当てた。

「ダ——っ！」

「王子。それでも私は、貴方を王として迎えられような世界に生まれていれば、と思いますよ」

「……………」

マモルは何も言わず、泣き出しそうな表情でされるがままにしていた。

アタシも飛びかかろうとするが、多分間に合わない。

「おさらばです」

妖魔の肩に力がこもる。

と、そこへ短い風切音が走り、妖魔の額を赤黒い点が穿^{うが}った。のけぞった妖魔の身体が背後の壁に叩きつけられる。

「やれやれ。危いところでした」

とぼけた少年声に振り返ると、ルナがぷかぷかとその場に浮いていた。

「ルナ！ 何で、こんなことを——っ！」

怒鳴るマモルの表情は、噴き出すような怒りに満ちていた。こんなこと、始めてだった。そんな激情が彼にも存在するなどと、思いも寄らなかった。

「何故？ 主君のお命をお守りするのが、臣たる者の務めにございませう」

言いながら、しかしルナの台詞からは家臣から主へと向けられる敬意らしきものが、すっぱりと抜け落ちていた。それを受けるマモルの視線にも、旧臣との再会を慈しむ様子は微塵もない。

ひどく緊張感を伴った空気にアタシが言葉を失う内に、妖魔の屍体がうつすらと薄らいでゆく。空を見上げれば、色彩を失っていた世界が一気に晴れ、淡い茜色に染まる夜明け前の空が広がってゆく。破壊の限りを尽くされた周囲の空間も、何事もなかったかのように元の閑静な住宅街へと戻ってゆく——封鎖空間が解かれたのだ。

そしてもう一度、妖魔のいた空間に目を落とすと、もうそこには何の痕跡も残っていないかった。それを痛ましく感じてしまうのは、多少なりとアタシもこの妖魔の存在に心動かされるものがあつたということなのだろうか。

「しかし、最後の最後で任務よりも忠義を選ぶとは」

「どういう意味です？」

訊ねるマモルに、少年の声を捨て、邪悪な嗤^えみを含んだ魔王の低音^スでルナが説明する。

「貴方を『連れてこい』というのが、この男の任務だった。だのにそれを無視して、王子の命を奪おうとした——貴方^{あるじ}の存在が、主にとっての厄災でしかないこと悟ったのでしよう。確かにそれをやられたら、ここまで苦勞して仕込んだ私の努力も水の泡だ」

「ルナ、君は——！」

「おっと、誤解なさらなくてください。今度の一件、私はほとんど誰にも嘘はついていない。二人の王女も、おそらく私の存在にも、その意図にも気づいているでしょう。いずれも聡明な姫君ですからな。しかし、それがこの話の肝でもある」

「何が言いたいんだ？」

「この話はですね、王子。強度の高い、信頼の置ける情報。妥当でもっともらしく、決して間違っていない理屈。そしてシンプルなールのゲーム。貴方の身柄を逸早く押さえたものが勝つ。うん、実にシンプル。」

しかし、この見通しのよさが曲者でしてね。自分ならうまくやれると思って、ついつい手を出してしまう——それが破滅への片道切符だとも知らず」

「ルナ、君は何がやりたいんだ」

根気強く訊ねるマモルに、ルナは結論を口にした。

「勿論、二人の姫君に喰いあってもらって、今のクイーン政権の足元を揺さぶるのです」

「いい加減にしろ！」マモルは激高をルナに叩きつけた。

「そんなことのために彼を殺したのか！？」

「ええ。そうです」ルナはあっさりと認めた。

「死人でも出てもらわなければ、誰も本気にならない。王子もおっしゃったではないですか、政治的イシューとして、いまや、王子の存在はさほど高くはない。しかし、死人が出たとなれば、話は別だ。身内にはその死に対する説明責任が生じ、敵から見れば相手がそれほど本気になっていいる証と映る。^{あかし}要するに掛け金^{レート}が跳ね上がって、引くに引けなくなるのですよ。」

ふふ。願わくば、更なる死を。更なる流血を。本国の情勢に影響を及ぼすには、まだまだ血の量が足りませぬわ」

聞いていて吐き気を催してきた。畜生。嬉々として人の死を語りやがって。

「もう、やめろ！ そんなことに何の意味があるんだ！」

「意味ならあります。卑俗な今のクイーンの政權を覆し、貴方様を再び玉座へと就ける。そのための策にございますれば」

「くだらない。王国の民は、クイーンの下で平和を取り戻そうとしている。今更、僕の出番なんかない」

まっすぐに前を見据えて断言するマモルに、だがルナはヒステリックな哄笑を返した。

「平和？ 平和？ 平和ですと？」

王子、あなたは玉座に座ったご自身の経験から、何も学んでらっしゃらないのですか？

平和とは、王子、所詮、局所的な現象でしかない。世界の全体を^{あまね}遍く見渡せば、暴力は常に偏在する。局所的に暴力を排し、安定した地域や空間を作り上げても、それは他の地域や見えない領域に暴力を押し込んでいるに過ぎない。社会の在り様によってその^{あらわ}顕れ方が違うというだけに過ぎませぬ。

王の仕事とは、その在り様をデザインすること。偏在する暴力を『再配分』し、その道筋を整え、国家という系^{システム}全体の安寧と発展に寄与するように、世界を作り変え、運営することです。

王子、貴方の誤りはそこを理解しなかったことだ。局所的な現象にすぎない『平和』を全土に適用しようとすれば、無理が生じて世界が崩壊してしまうのは当たり前の話ではないですか。

国家の役目とは、富と暴力の『再配分』に尽きる。持ち過ぎた者から取り上げ、持たざる者に配るのです。奪われた者、押し付けられた者、その本人がたとえ納得しようとしまいと」

「そんな、理不尽な真似——」

「理不尽！ まさしく、そう。政治とは、統治とは、国家の運営とは、個人にとっては常に誠に理不尽なものです。たとえそれが世界の安定を保つためと聞かされたところで、誰が己が身に降りかかる不幸を納得できましようや。」

なればこそ、王子、貴方の身に流れる血が意味を持つ」

「何が言いたい？」

「ヒトが理不尽な現実を前にして、それを素直に呑み込むには理由があるものです。だが、己と同じ卑俗なヒトの支配者により押し付けられた理不尽では、呑み込むにもおのずと限界がある。妬み、嫉みが知らず知らずのうちに蓄積され、社会を歪ませる。やがて、そこに為政者の意図しない暴力が吹き溜まり、世界は破綻する。」

だが、それがヒトの身ではなく神によってもたらされた苦難であるなら、ヒトはその理不尽を是として受け入れましょう。どこに向けるでもない諦観をもって、その理不尽を呑み込むでありましょう。しかし、日々の政に神の顕現が望むべくもないのなら、せめて神にもっとも近いヒト——もっとも神聖にして高貴なる血筋の者、王子、貴方がそれを行わねばなりません。それこそが、鎮護国家の在るべき姿。美しい国とは、斯く在れかし。

その美しい国の実現のためなら、私は幾度たりと世界を劫火に投げ込みましょうぞ」

「……………」

生身の人間だったら口角泡を飛ばす勢いで、熱く語るルナの台詞は、もはや狂人の戯言でしかなかった。とても正気とは思えない。国家の安寧のためと言いながら、その理想の国家像のためなら何度でも世界を滅ぼすなどと口にする辺りなど、滅茶苦茶だ。

だが、狂人の論理が得てして妙な説得力を持つように、アタシ達が圧倒されたのも事実だった。

「……ルナ、君は何故、そこまで今の世界を憎むんだ？ 何があったんだ？ 王国随一の忠臣とまで謳われた君をそこまで絶望させたものは、何だ？」

「王子、私は今でも王室の藩屏にございますよ。戦塵にまみれた生身の身体で、ご祖父君とともに王国の山野を駆け巡ったあの頃と、何ひとつ変わってはおりませぬ。仕えるに足る聡明なる主君に恵まれ、共に死線を越えた得がたい戦友達に囲まれ、斃すべき強敵は尽きることなく、護るべき民と愛すべき山野に満たされたあの至福の日々は、私の一生の誇りでございます。」

しかし、いずれ語る時が参りましょう。今の王国の民どもがいかに唾棄すべき存在かを。

それを知れば王子、貴方にもご理解いただけるはずだ。

彼奴らは一度、滅びねばならない。絶望にのた打ち回りながら、己が人生の理不尽さを呪いながら滅びねばならない。阿鼻叫喚の地獄の中で、あらゆる苦痛とともに血の海に沈まねばならない。

その山野に折り重なる屍かばね いしづえを礎いしづえにしてこそ、在るべき法と秩序と王家への忠誠によってなる、真の美しい国が立ち上がるのです」

中空に浮かんだまま謳い上げるようにぶち上げると、ぬいぐるみは嬉しげにくるくるとしばらくその場で旋回し、やがてぴたりとこちらを向いて静止した。

「しかし、今はまだその刻ときではない。

さあ、そろそろ今宵のステージも幕といたしましょう。

この老臣めにはやることが山のようにあるのです。次のステージまでに、たっぷりと仕込みをせねばなりません。

王子、貴方と貴方が選ばれた妃となる女性のために、次のステージは最高の道具立て、最高の役者、最高の舞台でおもてなしいたしましょう。悲劇と喜劇と惨劇が絶妙なハーモニーを奏でる、奇跡のようなセッションをお届けしましょう。

是非とも、是非とも、お楽しみに。

それでは、お二人とも、そのときまでお健やかに」

そう告げると、ぬいぐるみはぺこりと頭を下げ——不意にぽとりと地面に落ちた。

それを見て、アタシ達はルナが去ったことを、知った。

「……何なの、アレ？」

「王国随一の忠臣、敵からも賞賛される忠義仁愛の将軍、僕の子供の頃から教育係で——今はただの悪霊さ」

路上に落ちたぬいぐるみを拾い上げ、マモルは疲れたように溜息をついた。

「まあ、以前から忠誠心で片づけるには、いささか度の過ぎるところがあったんだけど、あそこまでぶっ壊れていたとは」

「昨日今日、どうにかなったって感じでもなかったけど」

「地上にまた亡命することになった辺りから、タガが外れてきたんだよなあ。それでまあ、逃げ出したんだけど。」

でも、それを言い出せば、君達を捲き込んで先代クイーンと戦わせたのだって、正気の沙汰じゃない。自分たちの国の地域紛争に、よその国の、しかも年端もいかない女の子達を捲き込むなんて。あれほど止めたのに。

おまけに、勝手に君達に变身スーツまで与えて。あれは元々、大昔に滅んだ古代暗黒魔導帝国の聖遺物で、どんな副作用があるかもろくに――」

そこまで言いかけたマモルは、微妙な表情を向けるアタシと目が合い、うろたえたように視線を泳がせた。

「あー、今更いいよね、そんな話」

よくねえよ。今も着てんだぞ、アタシや。

「いや、大丈夫。あの時は判らなかったってだけの話だから。君達の運用実験によって、安全性が立証され――」

「結局、モルモット扱いじゃねえか！」

一発ぶっ飛ばしてから、溜息ひとつ吐いて話題を切り替えた。

「で、どうすんの？」

「どうって……。まあ、何とかするさ」

「んな、無責任な」

あんな得体の知れない化け物を、マモルひとりでどうにかできるとも思えないのだけど。

「うーん……。まあ、ただ、ルナがどんな仕掛けを考えているにせよ、それは僕の存在を前提としてるわけだし、今日のあれで本音の部分も、ぶっ壊れ具合も掴めた。付け込む隙は多分、あるよ。後は、王国に信頼の置けるチャンネルがあれば、打つ手も広がるんだけど……やっぱり、一度、戻らないとダメか」

「いや、ルナの件もそうだけど、あんた自身がどうしたいかって話」
「……………」

マモルは一瞬、沈痛な表情を浮かべ、それを振り払うかのように笑顔で言った。

「ルナの件に決着をつけたら、それで終わり。後は、いつもの呑気なマモルさんに戻ります」

「そんな虫のいい話が通用するわけないでしょ」アタシはきっぱりと言った。

「あんな化け物の始末、ひとりでできるはずないんだから、王国だろうが地上こつちだろうが、仲間を募って立ち向かわなくちゃならないんですよ。だけど、それはその仲間達の命や人生に責任を持つてことよ。それもいざ動き出せばいろんなところに影響が出始めるから、すぐにこっちもさっちも行かなくなる。片が付いたら片が付いたで、こんな大仕事、後始末だって簡単に済むはずがない。仕事ってのは、何だってそんなものよ。」

それはあんただって判っているから、アタシん家でヒモみたいな生活してたんでしょ。世界とコミットしなければ、誰も傷つけなくて済むから。自分が傷つかなくて済むから」

言いながら、でもそれはマモルだけの話でないことにも気づいていた。アタシだって、「生きてゆくため」と言い訳しながら、日々の忙しさの中で自分の人生ときちんと向かい合うことをしなくなっていた。いや、もしかすると、向かい合いたくないからこそ、忙しさにかまけていたのかも。

アタシこそ、どうしたいの？

「アミ……………」

「でも、もう終わり。バカンス気分は今日で終了。こっから先のこと、ちゃんと考えなきゃ。」

それでも『どうしたい？』って質問が漠然とし過ぎてるってんなら、たったひとつだけの質問で許したげる」

アタシはちよっただけ息を吸って、訊いた。

「アタシをどうしたいの？」

マモルが息を呑むのが判った。勿論、ずるい質問だってことは判っている。それはアタシ自身が出さなきゃいけない答えでもあるのだ。だけど、それだけに今のマモルにとって、もつとも必要な問いで、もつとも乗り越えなければならぬ問いだってことも判っていた。

マモルはどう答えるだろうか。

アタシから一度逃げ出して、結局、戻ってきたこの男は、どんな答えを口にするのだろう。

今度もまた逃げることを選ぶのか。

それは世界からなのか、アタシからなのか、あるいは自分自身からなのか。

それとも、別の選択をするのだろうか。

そして、その選択をアタシはどう受け留めるのだろうか？

たぶん、その答えはその瞬間にしかないことを、アタシは知っていた。

マモルがじっとこちらを見つめている。

その瞳に映るのは、はじめは問いへの驚き、動揺、迷い、怯え――
――だけど、それはすべてアタシ自身の中に在るものでもあった。

だから最後に、それが静かで、揺るぎない確信へと移り変ってゆくその道筋を、アタシも自然に辿ることができた。

だからマモルが何も言わずアタシの手を取ったとき、それを迷いなく受け入れていた。

エピローグ

で、それから何が変わったかというところ——実は、大して何も変わっていない。

アタシは相も変わらず、三流オヤジ向け雑誌の編集部で働いていて、立場も契約社員のままだ。残業代もつかないし、そのくせ校正前は徹夜の連続で、そこもちっとも変わっていない。

多少は変わったことといえば、仕事の合間に、少しプライベートな書き物をはじめたくらいか。知り合いの編集者や作家にちらちらと見せてみた感触では、まあ、悪くはなさそうだ。ただ、その都度、「あなたが、こんな少女趣味な文章書くなんでね」などとにやつかれるのだけは、勘弁して欲しいと思うのだけだ。

あの事件自体の後始末について、少しまとめておこう。

家財道具については、業者にねじ込んだら、半分くらいは取り戻せた。ただし、それなりの金は払わざる得なかったし、パソコンの中のデータは既にきれいに消去済みだった。正直、これが一番痛かった。

それに出費は、それだけではなかった。封鎖空間が晴れて、破壊されまくった周囲の空間はきれいに元に戻ったのに、スライスされたベスパだけはそのままだった。何かの嫌がらせか？ 念のため、保険が効かないかと保険会社に当たってみたが、市街地で車体が三枚に下ろされる事故など認められるはずもなく、全損扱いで新車を後輩に買って返す羽目になった。これが意外と高いのな、ベスパって。畜生。

ちなみに写真一枚撮る暇もなく、レコーダーに記録された「魔法の王国の地域紛争話」など記事にするわけにもいかず、結局、スクリーン記事で一儲けという企みはあっけなく泡と消えた。

そんなわけで、社会人になって以来、乏しい給料から僅かづつ溜め込んできた貯金はきれいさっぱり使い果たしてしまった。とほほ。嫁入り資金だか、独立資金だか、老後用のマンション購入の頭金になるはずだった資金がなくなって、とりあえずは日々のお仕事に精進するしかなくなったというわけだ。やれやれ。

それでマモルはと言えば、これも相変わらずアタシの家で暮らしている。

ただちよくちよく家を空けるようになった。浮気なんかじゃなく、例のルナ絡みの事情だということは判っているので、家でごろごろされてるよりいいかと。目的意識が芽生えたのか、多少顔つきもましになったみたいだし。

ちなみそっちの進捗はどうなってるのかと訊くと、いつも「大丈夫、大丈夫」とへらへらと煙に捲かれてしまう。

なるほど。こいつ、仕事を自宅に持ち込まないタイプだったか。まったく、これだから男ってのは。

まあ、本当に助けが必要ならちゃんと求めてくるだろう。

割とその辺の信頼感というか、こいつは何があってもちゃんとこの家に帰ってくるというそうした安心感が、あの事件で得たもっとも大きな成果だったかもしれない。

何となく、「男と暮らす」ということの意味を、再確認しつつある今日この頃だったりする。

いや、ま、それにしたって、少しぐらい家に金入れてくれないもんかなと思わないでもないけどね。

ああ、それともうひとつだけ。

あの後、朝焼けの十番町を最寄駅まで歩きながら、どうしてもこれだけは訊いておかなくちゃいけない質問をマモルにぶつけた。

「あんた、はじめからアタシと知ってて一緒に暮らし始めたの？」

「え？ ああ、それはね。顔を見ればすぐに判ったし。こういう関係になっちゃったのは、少し予定外だったけど」

マモルが苦笑する。

「アタシは、マモルはムーンと付き合うものだと思ってた」

「彼女は恋に恋してただけさ。本気の恋愛じゃないよ」

確かに、それはそうだったかもしれない。

「それに大学生が中学生に手を出すのは、さすがに抵抗が……」

「その割に、アタシとの時はそのまま部屋に転がり込んできたくせに」

「いや、それは、その時にはふたりとも大人だったわけだし……」

「ごによごによとバツが悪そうに口を濁す。ま、こっちも本気で責める気はないけど。」

「本当はさ、街で君の姿を見かけて。それで皆どうしてるのかな、って懐かしくなって声を掛けたんだ。まあ、皆、大事な妹みたいなものだしね」

「じゃあ、妹に手を出したんだ」

「いや、だから、それは……」げふんげふんと咳きこんでから、マモルは言った。

「こういう言い方するとき、思い上がってる様に思われるかもしれないけど、あの時のアミは誰かに支えてもらいたがってるみたいに見えたんだ」

「そんな、安手のホストの口説き文句みたいな話……」

「冗談じゃないよ。あの晩だけじゃない。アミが頑張ってお仕事しているのは凄いいけど、その分、何かから必死になって逃げようとしているようにも感じてたんだ。」

……いや、多分、ちよつと違うな。亡命前の僕自身がそうだったから、特にそう感じてたのかもしれない。ま、どっちにしても今に思えばって話だけだね。

だから君を支えたかったし、支えることで自分を支えてもらいた

かったんだと思う」

「……………」

黙ってその横顔を見つめるアタシに、マモルは何の脈絡もなく不意に訊ねてきた。

「アミさ、何で小説書くのやめちゃったの？」

「な、何よ、いきなり？」

「前、書いてたじゃない」

「ちゅ、中学生の頃の話でしょ。高校入ったら、部活や受験でそれどころじゃなくなってやめちゃったわよ」

本当は大学出るまで細々と続けていた。いくつか書き上げた作品を、ティーン向けライトノベルを出してる編集部に持ち込んで、あわよくば作家デビュー。そうでなくとも編集部に潜り込めないかと企んでたのだが、持ち込む先々で「いやあ、小説としてはよく出来てるんだけど、イマドキのケータイ持つてる女の子向けには、もっと過激じゃないと」などと言われて、泣きながら原稿を焼き捨てたのだ。いや、まあ、今にして思えば、アタシが担当編集者でも同じ回答をしたと思うので、別な意味で抹殺したい過去ではあるのだが。

「よく判らないけどさ。また、書いたら」

「何よ、その無責任な言い方」

「アミは昔っから本好きで、自分でも小説も書いてたから、今の仕事をしているのは不思議でもないけど、でも仕事の話をしている時のアミって、そんなに幸せそうに話してないんだよね。それがずっと気になってたんだ。」

いろんな状況があつての話なんだろうから仕事の方には口を出さずにきたけど、アミが自分の本当にやりたいことをもう一度見直すために、昔みたいにもう小説を書き始めるのはわるくないんじゃないかな

「……………」

そんなわけで、手慰みレベルだけど、アタシは再び小説を書き始めた。今のところ、アタシが担当編集なら頭を抱えそうなレベルの

作品しかできてないってのが、悩ましいところなのだけど。

雑然と積まれた資料の山の奥で、『鬼警部アイアンサイド』のテーマが軽やかに鳴った。

校正紙に赤を入れながら、一発で正確その所在を探り当て、携帯に出る。

『あ、もしもし、アミかい？』

マモルだった。職場に電話を掛けてくるのは珍しい。

「何？ 新聞でも取らされちゃったの？ 会社で各紙取ってるんで、自宅では読まないから追い返せて、あれほど——」

『いや、今ちょっとこっちで手が足りなくなつて——あつ、そこ、勝手に始めちゃダメだって！』

続けてガラスだか金属だかの破碎音。あー、だいたい事情は呑み込めてきた。

『ごめん。ちょっと手を貸して——うわあつ、止めろ、そこっ！』

今度は何だか至近距離に落雷したような音がした。あーあ。

「で、どこでやってんの？ 新宿？ そんな人通りの多い所で？ ああ、また封鎖空間で。携帯通じるんだ。安易な設定……いや、こっちの話。うんうん、じゃあ近くまで着いたら電話するから——」

そこで爆発音と悲鳴が立て続けに聴こえ、電話が切れた。……えーと、とりあえずアタシが現地着くまで死ぬな。

アタシは携帯を閉じ、机の上を見渡した。とはいえ、こっちもそんなに暇ってわけでもないんだけどな。

積み重ねられた校正紙の束を眺め、それから、結局、手元に戻ってきて今は会社の液晶モニタの下に鎮座ましましているアクセサリケースに目をやった。中身は勿論、マモルがくれたガラクタのアクセサリで、相も変わらず捨てきれずにここにあるのだった。

「ま、しょうがないか」

苦笑してアタシは席を立った。新宿までだったら、ぎりぎり地下

鉄が動いている時間だ。

「あれ、お帰りですか？」

ロッカーでコートに袖を通していると、バイトの男の子に訊かれた。

アタシはふと考え、軽くウィンクして答えた。

「ちょっとスーパードロインしてくるだけよ」

ぽかんと口を開けているバイト君を尻目に、アタシは編集部を後にする。

その足取りは、何、思ったほど悪くはなかった。

>Fin<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9108m/>

王子様とアタシ

2010年10月8日11時17分発行